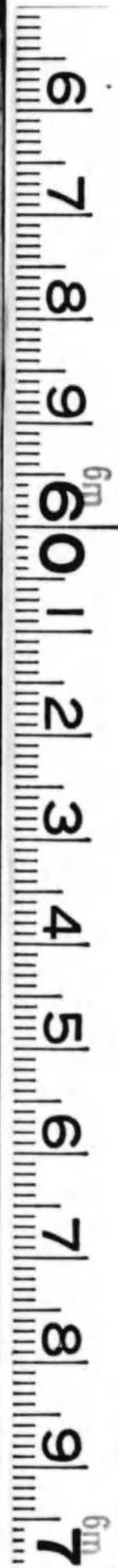


# 菜根譚講話

加藤咄堂著



大東出版社



# 始



特232  
837

248



送放

加藤咄堂著

菜根譚講話

大東出版社



はしがき

一、本書は昭和九年七月十六日より十四回に亘つて、聖典講義の時間に於て東京中央放送局より全國中繼を以て放送したる筆記に基き、多少の修正を加へ、講後更に三講を加へたものであります。

一、菜根譚の一書は深く儒、道、佛の三教の思想を咀嚼して之れを處世と修養とに應用すべく典麗優雅の文章を以て表現せられたので、言外に幽玄の意味を含ませて居りますから、それを大衆に解し易く講ずることは容易でありませんに、一講を二十分といふ制限の下に話さねばならぬので、多大の苦心を経て、僅々二十講の中に全篇

の主意を盛り、更に多くの話材を混入して放送したのでありますが、僅かの時間の中に成る可く多くの事を語らんといたしました結果、思ふに任せぬことが多く、頗る粗雑なものとなりましたが、それも拘はらず、江湖の熱誠なる激勵を得、且つこれが出版を慫慂する方も少くありませんので、放送局の許諾を得て、之れを刊行するにいたしました。菜根の滋味、これによつて充分傳へることは出来ずまいが、若し讀者心中の按排と調理とを待つて、現代人の食膳に、此一椀の粗菜を呈することが出来ますれば、私の幸福これに過ぎたるはありませぬ。

咄 堂 識

## 放送菜根譚講話目次

### 第一講 菜根の精華……………一

要約せられたる聖典……………東西兩洋の文章……………著者洪自誠……………菜根の二字……………君子の心事……………君子の才華……………海舟の南洲評

### 第二講 高潔の人……………一九

利に就く人心……………勢利紛華の誘惑……………尤も潔き人……………二程子の逸話……………智慧のからくり……………尤も高き人……………智械機巧を離る……………名人と上手……………名人の至言

### 第三講 喫緊と悠間……………三七

自然に對する態度……………靜中の動……………動中の靜……………有事と無事……………非常心と平常心……………獅子、兎を捕ふ……………宮本武藏の氣轉……………人間の非常時……………名人の覺悟

### 第四講 自心を觀ず……………四七

雄辯と沈黙……………夜氣存養……………眞如と妄心……………本覺と始

覺……見惑と思惑……慚恥の心……癡呆坊

第五講 處世の要道……………三

二つの態度……一步を譲れ……老子の三寶……退歩はこれ進歩……徒歩的處世觀……人に接するに寛大なれ……自利と利他……利益と道德

第六講 動靜二面……………九

修養の二面……靜中の修養……動中の修養……一簞の食一瓢の飲……何處も火宅か……盜り残したる窓の月……足ることを知れ……心を廣く持て

第七講 逆境の恩寵……………一九

順逆二境……逆境の場合……艱難を試練とす……生を決する心……順境の危険……自己に顧みよ……一葉の新聞も亦教訓……成功者と失敗者

第八講 英雄の資格……………二七

人物評價の三標準……細心の注意……小事を忽にする勿れ……人を欺かず……英雄の末路……ナポレオンと

石田三成……大楠公と文天祥……晩年の清節

第九講 世を涉るの術……………二四

誇る心と嫉む心……清を濁に寓す……屈原と漁父……一壺と三窟……情に絶るな……同情の擴大

第十講 人情の通患……………三〇

人情通じ難し……善いか悪いか……人情の悪い方面……人情の美點……畏服、利服、心服

第十一講 衣冠と人物……………三八

外觀の世の中……衣冠の尊卑……金持と貧乏……舞台の俳優……人生は一場の劇……運命の問題……因果關係

第十二講 心魔の降伏……………四三

魔とは何ぞ……心内の戦争……心の手綱引き締めよ……心の主人公……修養の三心

第十三講 天地と人生……………五三

悠久の歲月……眼を永遠に着けよ……死生の感想……

蝸牛角上の争ひ……傘下天地寛し……天地の風流

第十四講 處世と修養……………二五九

最悪の場合を豫想せよ……始末といふこと……超然たる心境……毀譽の渦中……利祿の香餌……茶根の滋味

附、講後三則

第一、無執着の心境……………二六一

無寒暑の公案……眠られぬ話……去來自由……明鏡の如き心……心越禪師の心膽……明鏡を打破せよ

第二、有生の樂、虚生の憂……………二五五

樂天か厭世か……世相は人心の反映……人生如是……人生の樂……生存の意義……一日の行持……生の尊重……一日是れ終生

第三、性天心地……………二五三

三養生……身心康濟……平常心是れ道……主人が悪い

裝幀 岡本一平

第一講 菜根の精華

君子の心事は、

天青く日白く、

人をして知らざらしむべからず。

君子の才華は、

玉包まれ珠藏る、

人をして知り易からしむべからず。

君子之心事、  
天青日白、  
不可使人不知、  
君子之才華、  
玉包珠藏、  
不可使人易知。

【參照】

人、常に菜根を噛み得ば則ち百事做すべし。(汪信民)  
今人、菜根を咬む能はざるに因て其の本心を失ふ。(朱子)

菜根の精華

要約せられたる聖典

先日放送局の方がお出になりまして、私に今日から引き続き菜根譚をお話せよといふ事でありました。菜根譚をこの聖典の時間にやるといふ事に就きましては、少し考へなければならん事があるのでありますが、私は二十年程前にこの菜根譚の講義を致しましたし、其の後の放送にも、時折、菜根譚の文句を引用致しましたことがありますから、さういふ關係で菜根譚なら加藤でも出来るだらうといふお積りであらうと思ひます。從來普通に聖典と申して居りますものは、二千年以上も前に釋迦とか孔子とか、或はキリストとか老子とかの人達の教へ遺されましたものが書き集められたも



のでありまして、或は四書五經であるとか佛敎の經典であるとか、基督の「バイブル」であるとか、或は又老子の道德經であるとかいふやうなものを申して居るのでありまして、その他に一宗一派の祖師方の書き現されたものを、その宗派で聖典として或は禪宗聖典とか、真宗聖典とかいふ具合に申して居りますが、この菜根譚はさう古いものではありませんので、漸く今から三百年かそこら以前に出来たものと思はれるのであります。又この菜根譚を著した人は、一宗一派の祖師といふやうな人ではないのであります。然乍ら此人は非常に儒敎、道敎、佛敎殊に禪宗に通じてゐる人でありまして、よくこれ等三敎の書物を読みこなし、その思想を自分のものにして、それら聖典の文句をも盛んに引用して、それを断片的に書き著されたのが、この菜根譚でありますから、この意味に於きまして菜根譚は、東洋思想の要約せられたる聖典なりと申して差支へないのであります。

この菜根譚は前篇後篇の二つに分れて居りまして、前篇二百二十五、後篇百三十四、合せて三百五十九の金言が集つて居ります。東洋の金玉たるもの、篇の何處を見ましても意味が頗る深いのでありますから、丁度黄金の杖を折りましたやうなもので、その一片を見ましても黄金たるの値打は充分にあるのであつて、全篇三百五十九の中今回放送致しますのは、僅かに十五句に過ぎませんので、其の参照に擧げたのを加へましても三十に足らるのでありますけれども、文句は異つて居つても其の意味は同じで、たゞ同一思想を異つた文字で現はされたに過ぎませんから、僅かな十五句の中に於きましても、菜根譚全篇の思想が充分に窺ふ事が出来ると思ふのであります。

東西兩洋の文章

この菜根譚の文章は只今も申しました通り断片的で、句は短いが非常に意味が深く、丁度無韻の詩と申しましてもいゝ程の名文であるのであります。一體、西洋の文章と東洋の文章とを比較して見ますと、一概には申されませんが、西洋の文章といふものは理智的でありまして、説明に於いて非常に長じて居ります。特に客観的描寫といふ事になると微に入り細を穿つて居りますけれども、其の言外に意を含める含蓄の味に於いては少しく缺ける處が無いとは申されないのであります。東洋の文章は成可く字を少くして、意味を深くしようといふ事になつて居りますから、そこに含蓄に富んで居る傾向があるのであります。丁度西洋の文章は油繪のやうによく寫されて居りますが、東洋の文章は文人畫のやうにチヨイと筆を着けて其の墨の着いてない處、筆の下してない處に、無限の意味を認めさせようと致します傾向があるのであります。

これは西洋の教へ方は萬事が説明的でありまして、解らせるといふ事を中心にしてやりますが、東洋の方は解らせるだけでなく覺らせるといふ事を中心にして居りますから、自然文章にも、かういふ傾向を生じたのではないかと思はれるのであります。若しさうだと致しますと、この菜根譚の文章は如何にも東洋の特色を充分に現はした代表的の文章であると、申しても差支へないのであります。

著者 洪自誠

唯惜しい事には菜根譚の著者洪自誠といふ人は、——この洪自誠が菜根譚を著したといふ事は明かでありませけれども——この人がどういふ人であつたかの傳記が明かでないのであります。これが日本で——恐らく初めてであらうと思ひますが、——翻刻せられました折、加賀の儒者の林瑜、

字は孚尹、通稱は周輔といふ人が、この序文に書きまして「未だ洪子の如何なる人なるかを審みせず、願ふに、必らず明季の間、隠退して道を樂むものか」とありまして其の傳記は詳かでないが、恐らく明の末に世を逃れて道を樂んで居つた人であらうと云うて居ります。支那に於きまして明の末から清の始め、今から三百年程前には、世の亂れて居つた爲めでもありませうが、かういふやうな文章で書き現はされた本が非常に多く、「聯瑾」、「樵談」或は「筆疇」又はこれら清言を集めた「傳家寶」であるとかいふやうな書物が出て居りますが、それ等は多く世に行はれないで、この菜根譚のみ出色の文字として最も多く今日に行はれて居るのであります。

菜根の二字

菜根譚と題しましたのは、菜は野菜の葉、根は野菜の根でありますから

大根、蕪とかいふやうな粗末な食物を指したのであります。淡泊な濃厚でない食物を指したのであります。この書を菜根と題したのは、この洪自誠といふ人からザツと四百年程前の宋の時代の儒者に汪信民といふ人があります。テキストの参照の方で御覽下さい。この汪信民の言葉に「人、常に菜根を咬み得ば則ち百事做すべし。」といふのがありまして、人が若し常に大根、菜葉などの不味い食物で辛抱するだけの氣概があるならば、どんな事でも出来るといふ意味であります。此語を聞いて宋の胡康侯が非常に嘆賞せられたといふことがあります。それを宋儒として有名な大學者の朱子が「小學」といふ書物を編纂する折、外篇の一番終ひに「汪信民嘗ていふ、人、若し菜根を咬み得ば、則ち百事做すべし、胡康儒、之れを聞いて、節を撃つて嘆賞す」といふ文を加へて、非常にこれを譽めて「今の人は菜根を咬む能はざるに因て其の本心を失ふ」といひ、今の人の本心を失つて輕佻浮薄に流

れ目前の利益のみを追つて居るのは、本當に自分といふ此心を失つて居るので、其の本は此の菜根を咬む事が出来ないからだと申して居ります。「鶴林玉露」といふ書物に「士大夫、一日も此味を知らざるべからず、百姓一日も此色あるべからず」とありまして廟堂の上に立つて天下の政治を執る人は、一日もこの菜根の味を知らなければならんし、民百姓には、一日も飢え渴えて菜葉のやうな色があつてはならない、民に菜色のありますのは、廟堂に立つ士大夫の政治が行き届かないからである、百姓を一日も菜色に在らしめてはならんといふので、更に後の文句が面白い。「今百姓に此色あるは正に士大夫の此の味を知らざるに縁る。」とあつて、民をして飢餓線上に立つて蒼い顔をしてゐる者の多いのは、上に立つ廟堂に立つ人々が、この菜葉や大根の味を知らないからだ、申して居ります。これ等の意味が含まれて、この本を菜根と申して居ります。全篇悉く浮華を避け質實に

着き、濃厚を避けて淡泊を旨とする教訓であると申しましても差支はないので、本書の題詞に「譚、菜根を以て名く、固より清苦歴練の中より來り亦栽培灌漑の裡より得」とありまして、著者自身の苦い経験に基き心の内に栽培して來たもので、決して世の道學者先生のやうな四角四面な頑固一點張りな教訓ではなく、頗る世態人情に通じた所謂、酸いも甘いも咬み分けた叱言を聴くやうに書いてゐるのがこの本の特色であります。

君子の心事

これからこゝに選びました十五の文句に就いてお話をいたすのでありますが、それも此著者の意を酌みまして成可く解り易く、これを現實生活の上に應用してお話を進めて行きたいと思ふのであります。

さて第一の文句は「君子の心事は、天青く日白く、人をして知らざらし

むべからず。君子の才華は玉包まれ珠藏る、人をして知り易からしむべからず。」君子と申しますのは男子の尊稱であります。道徳的に人間を比較します折に君子小人と申します。即ち道徳的に値打の少ない人が小人で、道徳的に値打の高い人が君子、つまり立派な人格者たる人々と申すことで、それらの人の心事と申しますのは心構へ又心持といふほどの義で、君子たる人は其の心持が天青く日白く晴天白日の如く澄み渡つて、一點の曇もないやうでなければならぬ。

浅みどり澄み渡りたる大空の

廣さを己が心ともがな

明治天皇の仰せられました御製に示されたやうに、青天白日の如く、誰にも見せられる處の心でなければならぬ。誰れに見せても裏もなく表もない八面玲瓏、人に與へて見せしむといふ公明な心でなければならぬと申

しますのでありますが、現代では全く之れに反對で、何事も秘密くで此には話せるけれども彼れには云へない。

語るなと一人に云へば又一人

語るなと語る人の世の中

で秘密は終ひに漏れて暴露せられるやうになるのであります。故に君子の心事は天青く日白く裏も表もなく誰にも見せられるやうでなければなりません。

### 君子の才華

唯然し「君子の才華は玉包み珠藏る、人をして知り易からしむべからず」で才華、即ち智慧のはたらき、此華々しい才華は玉包み珠藏る、丁度大きな巖の中に寶石が藏れて居り、又砂の中に寶玉が埋れてゐるやうに外から見

えないやうに奥深く納めてゐるのが良い、兎角才華といふものは表へ出し  
 たがるから、これを深く藏して置く事が如何にも奥床しいのであります。  
 三浦梅園が「學問は飯と心得べし、腹を満たすがためなり、掛け物のやうに  
 人に見せるためにあらず」と申しましたやうに、智慧才覚もその通りであ  
 りまして、深く藏する處に奥床しさがあるので、これを掛け物のやうに人  
 に見せびらかすものでないのであります。三浦梅園は又「學問は置き處に  
 依つて善し悪し分る、臍の下よし鼻の先あし、」と申して、臍の下即ち腹  
 の底におさめ、少しでも鼻の先にぶらさげるのを悪いといひましたが、鼻  
 の先にぶらさげる人は如何にもその人の心がオツチヨコチヨイな輕はずみ  
 な人に見えるものであります。古歌に

そこひなきふちやはさわぐ山川の  
 浅き瀬にこそあだ波は立て

で、底が深い處は水がよどんでチツとしてゐます。一碧泓として澄みわた  
 るといふ深い淵の水は静かでありまして、底の浅い谷川の水は騒ぎ廻る、  
 石を噛み岩に激して騒いで居ります、丁度そのやうに人間も才智を振り廻  
 して騒ぎ廻る人は自ら心の淺墓を示して居るので、偉い人程、これを内に  
 包んで、そこに比較して奥床しさがあるのであります。兎角現代は自分の  
 小才小智を鼻にかけたがるから、輕佻浮薄に陥るを免れないのであります。

海舟の南洲評

勝海舟は近代の偉人でありまして、此人がこれ亦近代の偉人たる西郷南洲  
 を評して「西郷は得體の知れん男だ、小さく叩けば小さく響き、大きく叩  
 けば大きく響く、どうも其の器量が測られぬ」と申したといふことであり  
 ますが、これはその才華が玉包まれ珠藏れて人をして知り易からしめなか

つたからではないかと思はれますし、又同じく勝海舟が江戸城明渡し致します時、「相手が西郷であるから心配はいらぬ」と云はれたといふことでもあります。これは西郷の心事が天青く、日白く人をして知らざらしむるやうなことのない公明正大な點に信用を置いたからではなからうかと思ふのであります。これ等の諸點に就いては、更にこの後々の文句に依りましてお話の機會があらうと思ひますから、今日はこれだけに致して置きます。

第二講 高潔の人

勢利紛華は、

近づかざる者を潔しとす、

之れに近づいて染めざるを尤も潔しと爲す、

智械機巧は、

知らざる者を高しと爲す、

之れを知つて用ひざる者を尤も高しと爲す。



人間が利益に向つて就く事は、蟻の甘みに就くが如くであります。それ  
 でありますから、權勢があり、利益があり、榮譽があるやうな家の門前は  
 何時でも人が、市をなすといふやうな有様で、來る人も、來る人も、何事  
 かを求めて行くといふ有様であります。兎角人間は權勢利益榮譽などに、  
 接近したがるものでありますから、若し其の人が一度權勢を失ひ、利益を  
 失ひ、榮譽を失ふといふやうな有様になるといふと、段々其處を離れて行  
 きます。所謂「富貴なれば他人も集り貧賤なれば親戚も亦離る」て、それが  
 人情でありますが、昔、瞿公といふ人が官にある時は賓客門を填め、官を

# 高潔の人

利に就く人心

勢利紛華、  
 不近者爲潔、  
 近之而不染者爲尤潔、  
 智械機巧、  
 不知者爲高、  
 知之而不用者爲尤高。

退いてからは門前雀羅を設けて、網を張つて雀が捕れるほど淋しくなつたと申すことであります。其の好んで人の近かんとする權勢なり利益なり榮譽等に近付かない者は、尤も潔いといふのが本日の本文であります。

勢利紛華の誘惑

「勢利紛華は近づかざる者を潔しとす(潔しと讀んでもよろしい)之れに近づいて而して染めざるを尤も潔しと爲す」これがこの文であります、勢は權勢、利は利益、紛華と申しますのは、凡て派手な事を申すのであります。さういふ權勢利益榮譽といふ派手な處には、人が近付きますが、それに近付かないのが潔い人、潔白な人と謂はれるのであります。これにも二通りありまして、自分がさういふ處に近付けない境遇にあるから、據なく近付かないといふ人と、近づかうと思へば近づけるが、自分の心を正しくする

ため之れに近づかない人があります。近付けない境遇に居るから近づかないといふ人は實は當てにならんであります。丁度田舎の青年が品行方正だ品行方正だ、この人ならば大丈夫と言はれてゐた青年が誘惑の多い都會に出て来て、目に見るもの、耳に聞くもの皆な自分の心を動かし、白粉臭ひ匂ひ、香り高さカフエー、ジャズの響き、けばくしい裝飾等に誘惑されては田舎での品行方正は少しも當にならず、當年の志、いつしか失せて墮落して行く者の多いのが世の習ひであります。これを例へてみれば、谷川の石は皆角があつてコツ／＼して居りますが、次第／＼に流れ流れて行く中に下流に参りますと、角が皆な取れて丸い石になつてしまふやうに、浮世の波風に吹き流されてスツカリ角が取れ、圓轉滑脱たる輕薄才子となり了るやうなものであります。自分がさういふ勢利紛華といふやうなものに近付かないといふのは、其の人の心事の高潔で、俳人一茶が敢然として「何

のその百萬石も笹の露」と申しましたやうに、加賀百萬石の勢利紛華も一茶には笹の上の露と同じだといふ、實に綺麗潔白なものであります。

尤も潔き人

然しもう一層進みましてこれに近付いて業まざる者、即ち勢利紛華の眞ツ只中に飛込んで、勢利紛華に少しも誘惑を受けないといふ境涯にまで至つて尤も潔いといふ事が出来る、昔ギリシヤのデオゲネスといふ哲學者が最も誘惑の多いといふ花柳の巷を歩いて居りますと、或人がかういふ處は哲學者先生などの來る處ぢやないと申しました。これに對してデオゲネスは「太陽は能く塵芥を照らすにあらざや」太陽は塵溜でも照して行くぢやないかと申しましたといふことがあります。太陽の如き清き心を持つて行けば如何なる勢利紛華の眞ツ只中にあつても、誘惑せられるやうな事はな

い。即ち勢利紛華の中に在り乍ら、それに染まぬ境涯に至る事が出来るのであります。

二程子の逸話

支那の程明道先生と程伊川先生といふ兄弟の大學者がありました。これは後世二程子といはるゝ人でありますが、或時、他の招待に應じて参りますと、其の主人がいろ／＼饗應をいたしまして、珍味佳肴は申すに及ばず、その席へ日本で申しますと、藝者といふやうな媚を賣る者が侍りましていろ／＼取り持ちを致しました。その有様を見て伊川先生は我々の席にかういふ者を侍らすといふ事は面白くないと言つて斷然席を蹴つて歸られました。兄の明道先生は矢張り其處に依然として御馳走になつて居られました。そこで伊川先生考へますに、主人は我々の心持ちを知らんからあゝい

ふ者を侍らしたのであらうが、兄が彼處に残つて居つたといふ事は怪しからん、と翌日釋明道先生の處へ行つて「昨夜あゝいふ女の居りましたのに、何故、兄上はお歸りにならなかつたのでありますか」と申しますと、明道先生は「イヤ、昨夜はさういふやうな者が居つたやうだが、俺の心には居らなかつた、今は座敷に居らんのに未だお前の心に居るのか」と言はれたといふ名高い話があります。これは明道、伊川兩先生の學說に基いて何人かが作りあげた話かも知れませんが、これに依りますと、伊川先生は近付かざるを以つて染まず、明道先生は近づいて染まなまいといふ境涯に迄、進んで居られると見る事が出来るのであります。唯近付かざるのは樂であります、近づいて染まぬといふ點に迄進んで行つて、蓮の花が泥中であつて、その美を保つてゐるやうに、我々は勢利紛華の擾々たる浮世の只中に在り乍ら、これに染まらなまいといふ心境を開いて行かねばならぬのであります。

智慧のからくり

「智械機巧は知らざる者を高しと爲す、之れを知つて而して用ひざる者を尤も高しと爲す」智械機巧といふことは智慧や才覺のから繰り算段であります。兎角當世は智慧才覺、さういふ事で危い橋を渡つてゐるのが世渡り上手であると云はれてゐる世の中でありますが、智慧才覺のやり繰り算段といふのは多く一時を誤魔化して自己の爲めになるやうにと其の場を脱れたり、自分の利益を計る權謀術數となつて行はれるので、かういふことを知らない者は、氣高い人であると申すべきであります。「あの男は正直で少しも掛け引きがない。」「あの人には掛け引きが出来ない。」「といふのは、氣高い人ではありますが、然しこれも唯馬鹿正直に少しも融通が利かんといふやうな事で、頑固一點張りになつてしまつては、世の中を渡つて行く事

が出来ないのであります。

尤も高き人

今日の世の中の人々が徒らに智械機巧を弄して悪賢くなつて行きますのに對しまして、さういふ事を知らず唯正直一方に行くといふ事は結構であります。馬鹿正直に陥りましては有難くない。我々の望む處のものは馬鹿でなくて、正直で、悪くなくて賢い、知つて用ひざるを尤も高しとなす。智恵才覚を知らんのではない、この場合はかうすればいい、あゝすれば出来るといふ事を知つて居りますけれども、かうすれば人の爲めにならん、あゝすれば自分の信念を害すると言つて自らを護るべき處のものを護つて、少しも智械機巧を用ひないといふ人が尤も氣高いと云はれるのであります。古來志士仁人と云はれる人は、世の爲め、人の爲めに身を捨つるの

行ひを致しますのは、決して自分の逃れるべき道がないからではない。

斯くすれば斯くなるものと知りながら

止むに止まれぬ大和魂

と知つてゐるが知つてゐながら止むに止まれずして、眞心を以つて盡して行くこれ志士仁人の高潔なる處であります。

智械機巧を離る

又達人が大觀して、それ等の智械機巧を離れるといふ事は、尤も氣高しとする處であります。昔或藩のお留守居が自分の藩の大事件で、他藩へ君命を帯びて使ひに行きますに就いて日頃から自分の師事して居ります或高徳の處に参りまして「今度君命を帯びて何々藩へ談判に参らなければなりません、どうしたらいいかと思ひまして、いろ／＼と考へまして

三段位に構へを定めて、對手がから来ればかう、あゝ来ればあゝと三段まで考へて参りましたがこれで宜しう御座いませうか」と申しますと、「それでは未だいかん、若しお前が心構へをしてゐても三段の他の手で向ふが来たらどうするか」「それならば四段まで考へて参りませうか」「いや、四段五段六段の心構へをして行つても對手がそれ以上の手で来た折には終に目的を達する事が出来ん。何等の心構へもする事なく唯一圖に真心を持つて、君命を盡して行かうといふ事を根本にして行くならば、その目的を達する事が出来るであらう。人間の智慧才覚には限りのあるものであつて、それに頼る事に依つて失敗が生ずる」と言つて教へられたといふ話があります、味ふべき言葉であると思はれます。

名人と上手

智慧才覚即ち智械機巧には限りがありました、従つて其處には行き詰りが生ずるのであります。一體智慧才覚に限りません。技巧といふものは學ぶべきものではありませんが、未だ技巧に捕はれてゐる間は、眞に名人上手の域に達したとは云へないのであります。或馬の先生が自分の弟子に二人上手な人がありまして、何方かに允可を與へやうと思つて、試して見ようとして或日二人を呼びまして、別々に呼んだのですが、その入口に荒馬を一匹繋いでおきました。そこで第一の弟子がツカ／＼と這入つて来ますといふと、遽なり馬は後脚をあげてボンと蹴りましたが、そこは馬術の心得がありますから、バツと飛び退きますと共に、ヒラリと馬の背中に乗つて兩足で馬をヂツと引締めまして、馬の靜まるのを見て、馬より下りて先生の門に入りました。今度は次の弟子が参りまして、ツト這入りかけて、その馬を見まして、馬の傍を通らずに、ヅツと廻り道をして其處の家に這入

つて來ました。第一の弟子のやつた事は技巧であつてこれはなか／＼むづかしいが、未だ技巧に捕はれて居る。上手とはいへるが未だ名人の域には達せぬ、第二の弟子のやつたことは誰れでも出来るやうですが、これが技巧を離れて眞に馬術の目的に達した、これこそ名人の風格であるといふので之に允可を與へられたといふ話があります。その通り技巧といふものは學ぶべきものでありますけれども、そればかりに頼つて居るといふと、其處に失敗を生ずるの憂ひがないとは云はれないのであります。

名人の至言

福地櫻痴先生は明治に於ける文章の達人であります。文章の書き方をその書生達に話されました折に「俺が文章を書くのに上手に書かう、うまく書かうと思つてゐた間は、却々文章に苦心したが、巧く出来なかつた。

それがどうかして人に解らせるやうに、解り易いやうにと考へて書くやうにしてから、樂々と文章が書けるやうになつたと言はれて居ります。これ技巧を學んで技巧を離れたのであります。確か清元の延壽太夫、何代目か存じませんが「藝はよくしよう／＼との當て氣があつてはよく出来るものではない。唯無難に、やらうと思つて居れば間違ひなく藝は出来るものだ」といふたといふことであります。此處にも、私は技巧を學んで、技巧を離れた處に、一段の心境を見出さなければならんと思ふのであります。これ等は凡て世渡りの上の智械機巧ばかりではないのであります。諸藝術の上に於きましても、我々は技巧を學んで技巧を忘れるの境涯まで、行かなければならぬのであります。淮南子に「善く泳ぐ者は溺れ、善く騎る者は墮つ」と申して居りますが、その通り泳ぎを知つてゐる者は、溺れ死をいたしまし、よく馬に乗る者は終に落る事があります。これはあまりに其の技巧

を頼み過ぎて無理をするからで、人間の世の中も自分の小さな智恵才覚に富んで居りましたも、そればかりを頼みとして世の中は渡れるものではない。これを知らないといふのは氣高いやうではあるが、知らないだけでは知つたら又やるかも知れないので、これを知つて用ひないといふ境涯に迄進みまして、初めて此處に立派な人格を養ふ事が出来得るといふこの主旨が、今日申しました本文の大要であります。

第三講 喫緊と悠閑

(平常時と非常時)



天地は寂然として動かず、  
而かも氣機は息むなく停ること少し、  
日月は晝夜に奔馳す、  
而かも貞明は萬古に易らず、  
故に君子は間時に喫緊の心思あるを要し、  
忙處に悠閒の趣味あるを要す。

天地寂然不動、  
 而氣機無息少停、  
 日月晝夜奔馳、  
 而貞明萬古不易、  
 故君子間時要有喫緊的心思、  
 忙處要有悠閑的趣味。

【參照】

事なきの時、心昏冥し易く、宜しく寂々にして照らすに  
 惺々を以てすべし、事あるの時、心奔馳し易し、宜し  
 く惺々にして主とするに寂々を以てすべし。

喫緊と悠閑

自然に對する態度

第一回にお話致しました通り、東洋の思想と西洋の思想とは、いろ／＼の點で違つた處があるのであります。殊に天地自然に對する態度といふものが、違つてゐるのであります。西洋では神が人間の爲めに天地萬物を造つたといふやうな考へが中心となつて居りますから、この自然を利用しこの自然を征服して人間生活の價値を向上せしめようとして、こゝに文化を開展して參つたので、文明とは自然の征服なりとは、西洋に於て考へられた思想であります。従つて谷川の音を聞きましても、この水の落差はどれ位あるから水力電氣に應用が出來るとか、山の色を見ましてもこの山は

かういふ色をしてゐるから、かういふ礦物はある筈だとか、又かういふ植物が多いといふやうに見まして、それをどういふ方法で採集するかを考へるといふやうであります。東洋は全くこれと異りまして天地自然が人間を生んで呉れ、育んで呉れたので、天地自然は人間の母であり父である、故に自然に親しみ、自然を愛し、自然に學ぶといふやうでありますから、即ちこの天地自然の道は、即ち人間の道といふやうな具合に考へられて居ります。有名な蘇東坡の「溪聲は便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身にあらざらんや」といひ、我が國古徳が此意味を「山の色溪のひびきもみなながら我が釋迦牟尼の聲と姿ぞ」と詠みましたやうに、山の色谷川の響も皆な釋迦牟尼佛の現はれて、こゝに自然の說法があるとなつて考へられて來たのであります。此自然に教へられ、自然に學びたる所を直ちに人間の心の上に應用するといふ教へが多くなりまして、中庸に「誠は天の道なり、こ

れを誠にするは人の道なり」とありますやうに、天道と人道とは一脈相通じて居るものありと見まして、自然に學ぶべきを書かれましたのが、本日お話しします第三講の本文であります。

静中の動

「天地は寂然として動かず、而かも氣機は息ひなく停ること少し、日月は晝夜に奔馳す、而かも貞明は萬古に易らず、故に君子は間時に喫緊の心思あるを要し、忙處に悠閑の趣味あるを要す」、即ち天地といふものは寂然と静かに、天は長へに高く、地は長へに廣く、少しも變化もなく、又動いて居りもしませぬやうですが、此天地の氣機、即ち、はたらきといふものは少しも息ひこともなく、停ることもなく、森羅萬象は刻々と、目に見えない動きて移り變つて居ます。「昨日迄早苗とりしが、いつしかに稻葉そよぎ

て、秋風ぞ吹く」で昨日迄田植をして居つたに何時しか、夏も過ぎて早や、秋風の吹くやうになりまして、天地の動き、天地の氣機といふものは息む事も、止まる事もなく、續いてゐるのであります。これは不變の中に變ずるものがあり、靜かな中に動くもののあるといふ事を示したのであります。

動中の靜

次の文句の「日月は晝夜に奔馳す」とありますのは、日は日々東より出て、月は夜々西に没す、光陰は隙行く駒の如くに馳け奔つて動き通してあります、しかしながらこの日の光、この月の光は、昔の日の光も、月の光も、今の光も少しも變らずして明かであります。即ち「日月は晝夜に奔馳す、而かも貞明は萬古に易らず」で、昔も今も少しも變つては居りません。これは變化の中に不變があり、動いてゐる中に靜かな處があるといふ事で、

上の天地寂然の二句は靜かな處に動いてゐる姿を示して、後の二句は動いて居る中に靜かな姿ある天地の有様をいふたものである。「靜けさや水に椿の落つる音」寂然として動かざる中に、靜中に動を感じる事が出来ます。「白露をこぼさぬ萩のうねりかな」うねりと動いて居るにも白露をこぼさぬ靜けさがあります。

有事と無事

此動中靜あり、靜中動あり、直ちに人間の心の上に應用致しまして、人間が、靜中に動を感じ、動中に靜を感じるやうに間時即ちひまな時、靜かな時にも常に動くの心構へを持つて居らねばならん、即ち「間時に喫緊の心思あるを要す」で、喫緊とはスワといふ場合に何時でも應ずる事が出来るやうに、日常の準備といふものがなければならん、忙處と忙しく動いてゐる

る時にも、悠たりとして静かな悠間的の趣味がなければならぬといふのであります。それは参照の處を御覽願ひます。「事なきの時、心、昏冥し易く、宜しく寂々にして照らすに惺々を以てすべし、事あるの時、心、奔馳し易し、宜しく惺々にして主とするに寂々を以てすべし。」事のない處で心が暗く沈んで何も明かでなくなる。その時にこの寂然として静かである處の心を照らすに、惺々と明かにはつきりとした心を以つてし、事あるの時、心、奔馳し易して、何か事件でもあると、心が馳け巡り易いのである。その時この馳け巡つてゐるいら／＼とした心を、寂々に静かにして行くといふことが、必要であるといふのであります。宜しく惺々にして主とするに、寂々を以てすべしであります。

非常時と平常心

今日非常時非常時と謂はれて居りますが、この非常時に對應するといふ事は矢張り平常の用意といふ事がなければなりません。非常時であるからと言つて、たゞ騒ぎ廻つて居つても、何もなりません。これは平生の覺悟が足りなかつたから騒ぎ廻らねばならぬやうになつたので、平生の覺悟さへ立派であれば、かう騒ぐには及びません。消火器は火事には必要であります。「ソレ火事だ」と火が出てからこれを買ひ歩いて、其の時の役に立つものではありません、非常時の準備は間事即ち事なき平常の時にして置かなければならぬのであります。

獅子、兎を捕ふ

さうして行けば今度非常な事件が起りました時にも、悠々として、これに應ずる事が出来るのであります。石天基といふ人の言葉に「獅子は兎

を捕ふる、尙象を捕ふるが如くす、これ象を捕ふる猶ほ兎を捕ふるが如くなる所以なり」といふのがあります、獅子のやうな猛獸が兎のやうな小さな獸を捕ふるといふやうなことは別段骨の折れない、何でもないことであるが、それに象を捕ふる如き覺悟をしてかゝる、こゝに平生の注意があるので、平生そういふ覺悟をしておくから今度象のやうな大敵に對しまして少しも恐るゝことなく、尙ほ兎を捕ふる如くに平氣で之れにかゝる事が出来る。獅子の兎を捕ふる尙象を捕ふるが如くす、この平生の覺悟といふものが、非常時に役立つて行くのであります。

宮本武藏の氣轉

宮本武藏は、劍道の達人と謂はれて居りますが、或時、宮本武藏が夏の夕方、筵を敷いて床几を置いて、それに腰掛けて涼んで居りました、此時

勿論腰に一本の刀も差して居りませんし、手には何にも持つて居りませんから、弟子が先生常に平生の覺悟と云はれるが、今此時こそ先生の技倆を試みるべき時であると考へまして、突然木刀を以て宮本武藏めがけて打込みました。眞に電光石火の氣合、此突嗟の間に宮本武藏は筵を一寸引きましたから、その拍子に打込んだ門人は前へのめつて來る一刹那、武藏は其の門人の衿髪をとつて顔を上げさせ「戯れたすな、まあこの月でも見よ」といふたといふ話が、傳へられて居ります。此處に名人の名人たり、達人の達人たる處があります。悠間な時にもスワといふ時の用意があつて、不意に打込むとトツサの中に一寸筵を引くといふ事は喫緊の心思が養はれて居つたからで、「月でも見よ」と戯れた所に、悠間の趣味が見られるのであります。此宮本武藏は、常に禪に參じて心膽を練り、趙州和尚の「平常心是れ道」といはれたのに、深く劍機を悟つたといふことであります。即ち

此平常の覺悟が、常に非常時に於いて充分な事が爲し得られるの基礎となるのであります。

人間の非常時

さて人間の非常時と申しますのは何であるかと申しますと、それは死ぬといふことであります。死ぬといふ事は人間の非常時であります。この死ぬといふ覺悟を常にしてゐるならば、いざといふ場合になつても恐れる事はないのであります。關山國師に向つて、或る人が死ぬといふ事に就て、教を乞ひますと「我が這裏生死なし」と喝破せられたといふことであります。生きる死ぬるを、大海に寄せては返す男波女波、波を離れて水なく水を離れて波なしと悟れば、生きる死ぬるといふ區別はないぞよといふ話があります。これは悟り切つた話ですが、盤珪禪師に「死なんとせらるる時

に、他の禪師達は皆遺偈を作つて辭世とせられるから、何か老師も遺偈をお書きになつたら如何ですか」といふと「老僧世に住む七十三、度生四十四年、前後半生日々前方に教へてゐる處、悉くこれ遺偈、此外に別に遺偈はない、何にも外の人々を真似てこれを作るには及ぶまい」と言はれて居ります。これは禪僧の話であります。佛聖と云はれた芭蕉も矢張り同じやうなことを言つて居ります。即ち其の臨終に當つて、或る人が辭世はと問ひますに對し「我れ古池の一句に眼を開きしより平生吟じ出す所、一も辭世ならぬはなし、昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世」即ち平生の發句が悉くこれ辭世、今更ら別に辭世を作らなければならんやうなことはないと云はれたと申します。死は喫緊時であります、この時にこの悠間的趣味があつたのは、平生の悠間時に、喫緊の心思あるからであります。

名人の覺悟

これは少し話が外に走るやうですが、名人とか、達人とか云はれる人には、喫緊の場合にも悠間的な心のゆとりがあつたといふ一例として、森田宗禪の事を申し上げませう。此人は徳川時代の中期に小笛の名人として知られた人でありますが、或る時、尾張大納言の處へ能のお催しがあるといふので、招ばれて行つたのであります。處が刻限になつて愈々能が始まるといふ時になつても、宗禪が居りません。囃子方の人々やお能掛りの人々が、何處へ行つた、何處へ行つたと、尋ね廻つて居りますと、宗禪は悠然として便所から出て参りました。あわてて探して居つた連中、急ぎ立て、「貴方は能が始まるといふのに何處へ行つてゐたのですか、刻限は初めから解つて居るのに、今頃になつて便所などへ行つて悠然として居られて

は困るぢやないか、そんなことをして若し刻限でも誤れば、此お屋敷をしく尻るやうなことになるつてはどうするのです」と息巻ますと、森田宗禪が申しますに「昨日から少しく腹を痛めてゐる。今、お能が初るといふに腹具合が悪くて氣分が定らぬから、便所に参つて腹具合を治して來たのである、刻限に遅れてお屋敷をしくじるといふのは仕方がないが、腹の具合が悪く氣分の整はぬのにどうして心のまゝな笛の音が出せる、殊に今日のお能は「松風」といふ大切なお能で、腹具合が悪くてどうして松風の音が吹けるか、刻限に遅れてお屋敷をしくじるのは自分の損で濟むが、藝術に志す者が、若し笛を吹きそこなつたとあつては、末代迄の恥辱であるから、私はトックリと腹具合を療して來たのである」というたといふことであります。今始まるといふ忙しい時にも、尚ほ此の悠然たる所を持つて藝術の道にいそしんだといふ此一話は、凡ての人の學ぶべき事であると思ひます、即ち今



の人は暇な時は暇に暮してしまひ、忙しい時には、忙しいと飛廻つて少しも悠りがないものでありますから、人間の氣性がせわしくなる。平生の覺悟がないから、非常時だ非常時だと言ふて騒ぎ廻らなければならぬので、此非常時の覺悟が、平常の時から準備して行くことによつて、非常時日本の國難を打開して行く心事を、養ふて行く事が出来るのではないかと思ひます。又大國民の襟度といふことも、實に喫緊の時に當りまして、悠間と悠つたりとした悠りがあつて、始めて大國民と云へるのであります。

天地自然の有様は、靜中に動あり、動中に靜あり、我等は間時に喫緊的の覺悟を、さうして忙處に悠間的趣味あるを教へてゐるといふのが、この文の大體の意味であるのであります。

第四講 自心を觀ず

夜深く人静かにして、

獨り坐して心を觀じ、

始めて妄窮りて而して眞の獨り露はるゝを覺ゆ、

毎に此中に於て、

大機趣を得、

既に眞現じて妄の逃れ難きを覺ゆ、

又此中に於て、

大慚慚を得。

夜深人靜、  
獨坐觀心、  
始覺妄窮而真獨露、  
每於此中、  
得大機趣、  
既覺真現而妄難逃、  
又於此中、  
得大慚慚。

【參照】

水、波たゞざれば則ち自ら定り、鏡、翳らざれば則ち自ら明か、故に心は清むべきなし、其の之れを混するものを去れば清自ら現はる。

自心を観ず

雄辯と沈黙

昨日は東洋思想と西洋思想との行き方の違ひといふ事を、お話しましたが、こゝに亦他の方面からお話の出来ることは、此喋べるといふ事でありませぬ。喋べるといふ事に就ても、東洋と西洋とでは非常に違つてゐるので、即ち西洋の政治組織、社會状態の關係もありません。思想的に自己發展といふことから、自分の考へを他に知らしめんとし、これを大衆に向つて喋べるといふ事、即ち演説といふやうな事は西洋に於いては非常に發達致しました。ギリシヤ、ローマの昔から、オレトリイとか、エロキエーションとかいふ雄辯術とか、能辯法といふ事が研究され、又發達もし

て参つたのでありますが、之に反して東洋に於きましては喋べるといふ事の反對の、黙つてゐるといふ事が非常に研究されてゐるのであります。それは印度の昔、佛教以前から禪といふ事がありました、禪は梵語で禪那、静慮を義とすとありまして、静かに黙つて慮かり考へて行くといふ事であります。佛教に於きましては、御承知の通り戒、定、慧の三學を修行の方法とし其の中の定は、詳しくは禪定といひ、其の方法として坐禪工夫の仕方が、いろ／＼説かれて居るのであります。支那に於きましても、亦静坐、静かに坐るといふ事が、昔から謂はれて居りましたが、殊に禪が這入りましてから、これが一段盛んになりました、宋の朱子は「半日讀書半日静坐長進せざるを憂へず」といひ、半日本を讀んで、半日静坐したならば、學問は上達せぬことはないと申して居ります。又明の王陽明は「日間の工夫紛擾を覺へば則ち静坐せよ」といひ、晝間いろ／＼の仕事で、心が騒つ

たならば、静かに坐つて見るがよいといふ事を申してゐるのであります。

夜氣存養

本日お話を致します本文は「夜深く人静かにして獨り坐して心を觀ず」とありまして、晝間は様々の心が外に動いて居るのでありますから、静める事が出来ませんが、夜遅くなつて、四隣人なく、萬籟寂として聲なしといふやうな、静かな時に、獨り孤燈の下に坐つて、自分の心を深く掘り下げて見ると、常には騒つてゐる心を、チツト静めて深く／＼心靈の泉へと掘り下げて見るのであります。丁度濁つた槽の水を澄まさうとする時に、如何に澄まさう／＼としてこれを攪き廻したからとて、水は澄むものではありませんが、静かにしておくと濁りは段々底に沈んで、その水は澄んで行くやうに、心も静坐して居ると次第に澄んで行くものであります。夜といふ

事を殊更らに云はれましたのは、孟子に「夜氣存養の説」といふ事があります。夜氣は夜の氣であります。晝は外物の爲めに我が本心が追使はれて摺り減らされて居ります。が、夜は外物に接觸する事なくして、我が本心の萌芽が次第に伸びて行くから、此の夜の氣を存養と保存して、心の内に養ひ育て、行く事が、修養の一つの工夫であると申して居ります。今も其の意味から特に「夜深く人静かにして獨り坐して心を觀じて茲に始めて妄翳りて眞の獨り露るゝを覺る」これは覺ると讀んでも宜しう御座います。此處では覺るといふ意味にお考へ下さいまして、始めて覺る即ち始覺といふ字を御記憶願つておきます。

眞如と妄心

そこで始めて妄が段々盡きてしまつて眞が現はれる。この眞とか妄とか

申します事は「大乘起信論」に、詳しく説いてあるのであります。眞は眞如と眞如と申しますのは、宇宙其者の眞實如常の體と相と用とを指すのであります。それが即ち我が心の本體として、お話いたしますので、此眞實如常の心の本體を本覺と申します。即ち本來自性清淨で、本から覺つて居つて一點の曇もなき心の本體、我々は此心の本體を持つて居るのであります。が、其處に忽念としてヒヨイと曇が出て、此心が動き、俺、お前といふ差別が起り、これが起ると俺は可愛いがお前は憎いとなり、此可愛い憎いが迷ひの本となつて、様々な間違つた煩惱、妄想が競ひ起つて、我が心が荒れて行くのであります。この順序は「大乘起信論」に詳しく書いてあるのであります。が、妄が極つて眞が露はれて来る、かう云つたのであります。「起信論」には喩を示しまして、眞如本覺の姿といふものは、鏡のやうに澄み渡つてゐる水といたしますと、其處に無明煩惱の風が吹いて初めて波が

起る、すると又その波が風を呼んで大波となる。大波は又風を起し波と觸れて狂瀾怒濤となつて行く。これが我々の心が迷ひに向つて行く順序で、無明、真如を動かして妄心を生じ、妄心無明と應じて妄境界を生ず、といふ風に説いてあるのであります。

本覺と始覺

これを平たく喩へて申しませうならば、夜、道を行くに、何とも思はずに歩いてゐる折には、何ともないのであります。處が一寸淋しいといふ氣が起る、淋しいといふ氣が起れば、怖いといふ氣が起る。怖いといふ氣が起ると、何か化物でも出やしないかと思ふ、化物が出やしないかといふ氣で歩いて居りますといふと、終には枯尾花を幽靈と見て驚いて逃げるといふやうなことになるのであります。そこを一寸踏み止まつて、「ナーに

幽靈ぢやない枯尾花である」とかう知りますのは、眞が露はれたからで、これを始覺といひますが、これは始覺の中でも最初の凡夫覺、「これで幽靈ぢやない枯尾花だ」と解りましても、未だ出やしないかといふ氣が残つて居ると、また此度は他の物を見て幽靈だと思つて逃げ出すかも知れない。幽靈など出るものか、と心がかうさりますといふと、覺りは一段進みます。これが相似覺と申しますが、未だ尙怖いといふ心が残つてゐると、また出やしないかといふ心が生ずるかも知れない、此の怖いといふ心が、なくなつて来れば何も怖くない、かうなると一部分の覺が開けた隨分覺となりまします。けれども未だ「淋しい」といふ心が残つて居りますといふと、怖いといふ心、出やしないかといふ心が生ずるかも知れずして。それからそれへと迷つて行くことになる、そこで此淋しいといふ心もなくなつてしまつた時、始めて何とも思はずに歩いて居つた時と同じやうになる。此處に於いて始覺

と本覺と一つになる。これを究竟覺といひ、始本不二となる、かういふ具合に説いて居りまして、妄盡きて始めの處に歸りました時、一點の翳りなき鏡の如き眞露はれ、花來たれば花映り、鳥來たれば鳥映る、様々のものが、心に映つて、しかも其の爲めに曇らされない鏡のやうに、應用自在の境地を開く、これを大機趣を得と申したのであります。だが然し乍ら、其處に行くのは却々難かしいのであります。

見惑と思惑

そこで、次の文句「既に眞現して妄の逃れ難きを覺る」本心が現はれて來は來たが、妄想といふものは、却々去り憎いもので、「夢と諦めりや何でもないが、そこが凡夫でねえあなた」、人の世は夢と思へば、何でもないけれども、本當に諦め切るといふ事は難しいのである。佛教では妄想を、二

つに分けまして、見惑、思惑と申して居ります。見惑といふのは、知識上の惑ひ、即ち理窟を間違へて居るとか、實驗を誤つて居るとかいふのでありますから、これは他から正しい理窟や、間違はない實驗を持つて行けば成程と直ぐ解る。しかし理窟が解つたからとて、それで本當に解つたといへない。酒を飲んで悪いといふ事は、誰でも知つてゐる「解つたか」解つた」といひますが、それでは「やめるか」といふと「やめぬ」といふ、この情の惑は却々に除き難い、これを思惑と申します。人生夢の如しと理窟の上では解つたが、情の上では、さうは思へない、此情の惑ひから、思惑は斷ち難い、佛教では「見惑頓斷破石の如し」で、見惑の方は、石を割るやうに截ち割ることが出来るが、思惑は「漸斷藕糸の如し」で、蓮の莖はポキ／＼と折れますけれども、その莖の間から小さな細い糸が繋がつて居つて、却々切れないものであるやうに、「成る程」とポキツと折れたが、「それはさう

だけれども」といふ細い糸を断つ事は出来ないの、真現れて、妄の逃れ難きを覺り、大慚慚を得るとあります。大慚慚の慚は恥じる、慚も恥じるといひためらふといふ意味をも持つて居りまして、つまり大きに恥かしいといふ感じてあります。

慚恥の心

本心露はれて自分の心を照して見るならば、如何にも恥しいといふ氣が起ります。この恥かしいといふ氣の起ることは、人間向上の第一歩で、一番氣の毒な人は常に恥かしいといふ事を知らずに、惡を爲しながら惡の惡たるを知らず、罪を重ねながら、罪の罪たるを知らず、墮落に墮落を重ねて、終ひに止まる處がないのであります。自分の心を振り返つて、自分のやつてゐる事を「あゝ惡かつた」と氣が附くといふことは、非常に結構な事であ

ります。「遺教經」の中には「慚恥の服は諸の莊嚴に於て最も第一とす」とありまして、恥かしいといふ事がいろ／＼な飾りの中で一番い／＼飾りである。一番い／＼着物であるといふ事は居ります。こゝで一つ考へねばならぬことは、此恥かしいといふやうな心が、何故起るかといふことであります。これを考へてみますと、我々の心は、もと／＼眞如本覺、悟りの當體で、鏡のやうに明かでないならばならぬものである。鏡は明かでないならばならぬものであるから、翳ると直ぐ翳つたといふ事に氣が附く。元々明かであるべき物であるから、翳つたと直ぐに氣が付き、錆びたと氣が附くのである。その事は參照の處に「水、波たゞざれば則ち自ら定り、鏡、翳らざれば則ち自ら明か、故に心は清むべきなし、其の之れを混ざるものを去れば清自ら現はる」水に波が立たなかつたならば、鏡に翳りがなかつたならば、則ち明かである。故に心を清くするには別に清めるには及ばぬ、其の



これを濁らして行くものを取り去れば、本来の清さは現はれるといふので  
外界の誘惑は翳りであり、内心の妄想は錆であります。その翳りを去り、  
錆を除けば其處に本心が現はれて、「あゝ悪かつた、かうするんぢやなかつ  
た」、恥かしいといふ氣が起つて來るといふのであります。これは東洋思想  
を通じて多少の違ひはありますけれども、人間の本心は實に立派な綺麗な  
もの、かう見てゐるのであります。殊に菜根譚の著者は、人間の本心は良  
智良能といふ綺麗なものである。之れが外界の誘惑に遇つたり、本心でな  
い迷ひの心から出た處の欲望、或は錆となり、或は翳りとなつてゐるので、  
これを拂つてしまへば、本心が現はれるといふて居るのであります。この  
事は尙ほ後にもお話する機會があるのであります。

寢 呆 坊

菜根譚はこゝまでいふて居るのでありますが、今一步突き込んで考へま  
すと、此「恥かしい」といふ氣が起つただけで、大機趣を得るといふやう  
な應用自在の境涯が得られるかといふとさうではない、この恥かしいとい  
ふ心は、未だ残つてゐる間は、恥かしいといふ心に囚はれて居る、恥かし  
いとか恥かしくないとかいふ差別の心を離れて、初めて自在地を得るので、  
或人がいろ／＼と本心を極めまして終に、大慚慚を得て、「夢覚めてみれば  
恥かし寢小便」といふ句を詠みました。夢から覺めてみると、これまでし  
て來たことは寢小便をして來たやうに、恥かしいといふ意味であります。  
この句を詠みまして、これで自分の心の覺りが、得られたのであると諸方  
へ吹聴して得々として居りまして、これを黄檗の萬丈和尚に示しますと、  
萬丈和尚は「恥かしくと未だ夢覚めぬば坊」と一喝を下されたといふ話が  
あります。本當に夢が覺めて、覺りを得たならば、恥かしいといふ心も、

既すでになくならねばならぬ。此この恥はづかしいといふ心こころも拂はらひ盡つくして、そこで始はじめて應用あうよう自在じざいの境きやうがい涯えが得えられるのでありますが、こゝでは修養しゆやうの一步いっほとして、先まづ此この恥はづかしいといふ心こころを起おこすべきを云いはれたのであります。

第五講 處世の要道

世に處するは一步を譲るを高しと爲す、  
歩を退くは即ち歩を進むるの張本。  
人を待つに一分を寛うするは是れ福。  
人を利するは實に己れを利するの根基。

處世讓一步爲高、  
退步即進步的張本、  
待人寬一分是福、  
利人實利己的根基、

【參照】

徑路窄き處、一步を留めて人の行くに與へ、滋味濃かなるに、  
三分を減じて人の嗜むに讓る、これ世に歩す一極安樂法。

處世の要道

二つの態度

昨日お話を致しましたのは自分の身を修むる方の教へてありますが、今日お話を致しますのは人と共に世を渡つて行く方、道を渡つて行くには、二つの行き方があります。一つは人を押し除けて自分が進んで行く、もう一つは人と共に手を繋いで仲よく進んで行く。先きのは即ち競争的態度で進んで行き、後のは互に譲り合つて行く互讓的態度であります。この二つの態度に就きましては、支那の辜鴻銘といふ學者は西洋は生活の物資が豊かでない地方から文化が進んで来たから生存といふ事が第一の要求となり、どうかして生きて行かう、人を押し除けても進んで

行かうといふ競争思想といふものが旺んになつたのであり、東洋、特に支那は物資の豊かな黄河、揚子江の流域に人が集つて、こゝに文化が開展したのであるから互に譲り合ふといふ道が発達したのであると申して居ります。それが果して正しい見解であるか、どうであるかは尙ほ充分に研究の餘地があるとは思ひますが、實際今日の世の中は萬事が西洋流で、競争的であることは疑ふべくもありません。「人はどうしても俺さへよければいい」、「人の頭をはつても俺は痛くない」、「人が飯を食つても俺の腹ははらぬ」人の頭の痛いのは辛抱するが、自分の腹の減つたのは辛抱出来ない。「といふ風に俺が俺が進んで行き利己的な個人主義といふものが旺んになつて参ります。これに對して押し除けられた連中は、「彼奴だつて俺だつて同じ人間ぢやないか」、「何も俺がへいへい言ふて彼奴が威張る筈はない、人類は平等なり」と反抗的な平等論を主張し、此利己と反抗とが互に相争ひ合つ

て居りますから、争ひに繼ぐに争ひを以つてするといふ風で、これでは人類の生活は果して安定して行くものでありませうか。人間といふものは如何に威張つても獨りでは生活して行けない。人と共に共同生活をして持つ持たれつして行くのでありますから、互に譲るといふ事がなくては人類の平和がどうして保たれませうか。勿論社會の共同生活の爲め、所謂世の爲め人の爲めになるといふ事ならば敢えて人後に落ちないやうな覺悟を持つて進んで行かなければなりません——例へば學問の研究であるとか、社會の改良であるとかいふやうなことは前線に立つて行かねばなりません、われわれの共同的なる日常生活の上にて徒らに他を排斥し他を押し除けて我れ一人自ら進んで行くといふ事は氣高い人間のする事であるとは思はれないのであります。

一步を譲れ

そこで「世に處するは一步を譲るを高しと爲す」でこの世を渡るに一步を人に譲つて行く、其處に實に氣高い處があると云ひ得ます。これを電車の乗り降りに見ましても、他を押し除けて自分が先に乗らうとするのと、人を先づ乗せて後から靜かに自分が乗つて行く人と何方が氣高いかは云ふ迄もない事でありませぬ。かういふ思想、一步を退くといふ思想は老子の「道徳經」に負ふ處が甚だ多いのであります。

老子の三寶

老子には三寶といふのがあります、老子の三寶と申しまして「曰く慈、曰く儉、曰く敢えて天下の先をなさず」で、これを持つて寶とすとあります。

す。慈は慈悲の慈でなさけ心、思ひやる心であります。教育勅語の御言葉にある「博愛衆に及ぼし」はこの思ひやりの心で、此心が人と共に世に處して行く根本の思想となるべきものであるであります。儉とは自分が身を護つて行く道、儉約の儉の字で、ついましやかといふ義で、人に對しては出しや張らず、物をも粗末にせず、何事も八分目にして行く事で教育勅語に「恭儉己を持し」と仰せられた教で、精神的にへりくだり物質的にはつゝいましてやかにして行くのであります。今の人は此八分目といふことに心をつげず、何事も十分に十分に志して行きますから其處に煩悶も起るのであります。

誰も見よ満つればやがて缺く月の

十六夜の空や人の世の中

これは武田信玄の歌であります。この人間の世の中といふものは満ちて行

けば缺ける、十分を望んだら必ず其處に失敗があるのだから、私は常に人間は十分の努力し八分の生活であれ」といふことを申しまして、これを生活安定の法と申して居るのであります。即ち働く事は十分に、暮し向きの方は八分目にして行く處に安定があるのであります。今の方は暮し向きを十分に、八分の努力で済ませようとするから其處に二分の缺陷が生ずる事になります。老子は儉、つゝまじやかにして行くといふ事を一つの世渡りの寶と致しました。その次は「敢えて天下の先をなさず」これは出しやばらんといふ事であり、差し出ないといふ事で、

さし出づる鋒先折れよものごとくに

己が心を金鎚にして

自分の心を金鎚にして差し出る心を折つて行けとの意味でありまして、「敢えて天下に先をなさず」と申したからとて時代遅れになれといふ意味で

はないのでありまして、澤庵和尚の「老子講話」には「曰く慈、曰く儉、曰く敢えて天下の先をなさず」と書かれたのは文章に變化あらしむる爲めに最後の言葉を長く書いたのであつて、その意味は讓るの一字で、お互に譲り合ふといふ事を天下の先をなさずと書かれたのであると、解釋して居られます、即ち慈と儉と讓とが老子の三寶で、此お互に譲り合ふといふ事と、つゝまじやかにするといふ事と、思ひやるといふ事が、世を渡るに最も大切な寶といたします。老子の思想を此處に取り入れまして「一步讓るを高し」とすといふたのであります。

退歩はこれ進歩

「歩を退くは即ち歩を進むるの張本」、足を退けるは足を進めて行くの基であるといふので一寸矛盾したやうですが、此退歩といふことにはな

深い意味があるのでありますが、その方は明日お話し致します機会に譲りまして、此處にはわれわれの實際の歩み方に於て退歩といふのを足を止めて行くことと御解釋になつてよろしい、即ち足を止めてから出して歩いて行く事でありませう。その事は参照の方に「徑路窄き處、一步を留めて人の行くに與へ、滋味濃かなるに、三分を減じて人の嗜むに譲る、これ世に歩す一極安樂法」とあります。これは山の小徑の狭い處で一足止めて人の行くに便利なやうにしてやる滋味濃かなるに、美味いものもそれを自分ばかり食はずに三分を減じて人の嗜むに譲るで、三分は残して人の好きなものに與へるといふ覺悟をして、世を渡るならばこれが一番安樂な處世法である、と云ふたので、こゝに歩を退くといふたのは此参照の前の文句に當るのであります。

徒歩的處世觀

私は毎度申すのでありますが、人間の世は足で歩いて行くやうなものでありまして、歩く時兩足を一緒に出せば、ひつくりかへつてしまひます。實際われわれの歩きますのは、一方の足が出れば一方が止まり、止つた方の足を出せば、進んだ足が止まり、かくて互違ひに出しては止め、止めては出して歩く事が出来るのであるのに、今の世の中の人々は生存競争、優勝劣敗、少しも油断はならぬと所謂超特急に足を出す事ばかり考へて足を止める事を知らず、二つの足を一緒に出さうとするから終にひつくりかへるの外はない。人間の眼はよく千里の遠きを見るも、足は一步づゝしか進む事が出来ない。こゝをよく考へて、足を止めては出し、出しては止めて行けばこれが安全第一、ゴーと出すことばかり考へてストップと止るこ



とを考へねばこれほど危険な事はない。然るに今の人は足を出す事ばかり考へて七顛八倒の苦み、昔の人は足を止める事ばかり考へて知足安分、此知足安分はよいが、出すことを知らなければ進歩がないのであります、足を出しては止め、止めては出して行く處世法が一番安定な方法であると思ふのであります。そこで歩を退くは即ち歩を進むの張本といはれて居るのであります。

人に接するに寛大なれ

次ぎの句は「人を待つに一分を寛うするは是れ福」人に接して行くに餘り苛酷に過ぎてはならんといふ意味で、此菜根譚の他の文句の中に「人の惡を攻むる太だ嚴なる勿れ、その受くるに堪ふるを思ふ事を要す」とありまして、人を責めるに餘りに手厳しくしてはよくない、凡そその人の耐

えられる程度に止めて置かなければならん。餘りに苛酷に失するとその人が反抗して「窮鼠却つて猫を咬む」で、爲めに自分に禍を招くの基となるといふてあります。まことに人に對するに寛大に、自分の心を省りみるには嚴格にしなければなりません。處が今の人は人を責むる方に嚴格であります、自分の心を省りみるには頗る寛大であります。佐藤一齋先生が、「自ら肅しむ秋霜の如く人に接するに春風の如し」といはれたやうに自ら肅しむのは秋の霜の如くきびしく、人に接するには春風の如く和かにせねばならぬのであります。即ち人をあしらふには一分を寛うして行く事は、それがやがて自分の幸福を招く所になつて來るものであるといふのであります。

自利と利他

次ぎの「人を利するは實に己れを利するの根基」とありますのも亦一種矛盾のやうで、人を利益して行くといふ事は自分の利益になる、ソナ馬鹿なことがあるものか、人を利益して行けば自分の利益がなくなるぢやないかといふかも知れませんが、その事に就て曹洞宗の高祖道元禪師が「愚人謂はくは利他を先きとすれば自らの利省かれぬべし、」人の爲めに盡して行けば自分の利益がなくなるやうに考へる。

「然にはあらざるなり、利行は一法なり、普く自他を利するなり」利行といふ事は一つで普く自他に通ずる法であつて自分の爲めばかり計ると却つて自分の爲めにならず、他の爲めも計つて行くことが、やがて自分の爲めになるので、例へば商賣をして自分が自分だけの利益を得ようと思ひますならば、悪い品物を高く賣ればそれで儲かるのであります。けれどもそんな事をしたならば一時は儲かつても誰も買ひに來なくなつてしま

ふ、これに反して良い品物を安く賣る、それでは自分の利益は少いやうですが、次第／＼に買ひ手が多くなり終に商賣は繁昌して永久の利益を得ることとなつて行くのであります。

利益と道徳

或商人がその子を戒めました言葉に「商人といふものは底のない柄杓で桶に水を入れるやうなものである。底のない柄杓でありますが水をくゞつて參りますからポトリ／＼と水が落ちる、此ポトリ／＼一滴、二滴、三滴、四滴と積り積つて桶一杯の水となるもので、これが商人の心得である、處が今の人は底のない柄杓で水を汲出すやうな馬鹿な事はしません。底のある柄杓でザアザアと入れるから直ぐ一杯になりさうなものだが、肝心の桶の底が抜けてゐるから何にもなるものではない」と申しました。この桶

の底は何であるかといふと、人の爲め世の爲めを計る即ち他を利用して行くといふ道德の根底であります。この立派な道德を精神の基礎として行けば一滴二滴と僅かな水も終には桶一杯となるやうに、他を利用する事がやがて自分を利する事の基になるのであります。二宮尊徳先生は「商賣の道は賣手喜び買手喜ぶ」といふやうでなければならんと云はれて居ります。餘り高く賣つて「賣手喜び買手悲しむ」では困る。又餘り値切つて「賣手悲しみ買手喜ぶ」でも困る。商賣は「賣手喜び買手喜ぶ」で共處で始めて商賣が完全に行はれるのである。この立派な精神、これが亦世を渡る上に於いて心得なければならんこととあります。先きにいふた滋味濃かなるに三分を減じて人の好きなものを皆食へずに人に分けてやるといふ程の思ひやりがあつたならば、世の中を渡るに極めて安心して樂に世を渡る事が出来るといふのが、この本文の主意であるのであります。

第六講 動靜二面

靜中の靜は眞の靜にあらず、  
動處に靜を得來つて、  
纔かに是れ性天の眞境、  
樂處の樂は眞の樂にあらず、  
苦中に樂を得來つて、  
纔かに心體の眞機を見る。

靜中靜非眞靜  
 動處靜得來  
 纔是性天之眞境  
 樂處樂非眞樂  
 苦中樂得來  
 纔見心體之眞機

【參照】

晴天白日的の節義は、暗室屋漏の中より培ひ來り、旋乾轉坤  
 的の經綸は、臨深履薄の處より操り來る。

動靜二面

修養の二面

先日來申述べて居ります菜根譚講話の全體を通じまして何が説いてある  
 かと申しますと、一方に自分自身の身を修め徳を養つて行く事。もう一つ  
 は世に處し道を行つて行く事。即ち一方は修養、一方は處世——世渡り——  
 この二つが説いてあるのであります。唯だ身を修め徳を養つて行くといふ  
 自身だけの修養で人格が完成出來ましても、それでは實際の役には立たな  
 いのであります。それが世の中に立つて日常生活の上には現はれるやうに  
 働いて行かねばならないのであります。昨日退歩即ち、歩を退くといふ言  
 葉にもう一つ深い意味がありますと申しましたのは此處の事でありませう。

唯だ自身の道を進めるだけでなく、更に進んで一切衆生を救つて行くといふ、世に處し道を行ふといふ働きがなければならぬのであります。佛教では「上求菩提下化衆生」と申しまして、上に菩提を求めますと共に下に衆生を濟度して行くのを菩薩の道とし、更に觀音とか地藏とかいふ立派な菩薩になりますと、一度悟りを開いて佛の境地にまで上つて、更に歩を退き下つて来て一切衆生の爲めに働くといふことになつて居るので、百尺竿頭に一步を退いて衆生濟度するといふ菩薩の心事は、世の中に處して行く人々も考へなければならぬことであります。

から見ますと修養といふ事に二つある。一つは靜中の修養、もう一つは動中の修養であります。

靜中の修養

この靜かな處での修養の方はまことにやり易い。自分が靜かな山の中に這入つて、浮世を離れて、心を靜めて行く事は難しい事ではありません。又日常人に接觸する事を止めて、獨り靜かに修養して行く事も出来ませけれども、山の中に這入つて自分の心が靜かになつたといふ修養や、獨りてゐて心が澄渡つたといふのでは、實際生活には役に立ちませぬので、西洋の昔、嘸に、或男が非常に癩癩持ちて人の顔を見ると腹が立つて困る。俺はこれを直さなければならぬといふので、自分の細君に云ひつけまして、「俺は山に這入つて癩癩を直して来るから毎日辨當を籠へ持つて来て置いて行つて呉れ、顔を見ると腹が立つといかぬから……」と申しまして山の中に這入りまして、毎日籠の石の上に細君の黙つて置いて行きました辨當を食ひ、瓢箪の水を飲んで長い修業をしたのであります。段々修業を積んで來まして、もう癩癩が直つた、山の中で靜かにしてゐる處では少しも癩

癢が起りませんから、大變自分の修養が出来上つたやうに思ひましたが、或時水を飲まふと致しまして、谷川に下つて、瀧壺の水を汲まふと致しましたが、どうしても瓢箪が浮いて、何度やつても何度やつても水が這入りません、これに耐りかねて瓢箪を岩に叩きつけて、ハツと氣がついて、これでは駄目だ、と自分の痼癢が未だ直つて居らんのを知つたといふ話があります。心が外界に依つて静かになつてゐるのは、外界が騒げば自分の心が騒ぐのであります。

動中の修養

本文に「静中の静は眞の静にあらず、動處に静を得來つて、纒かに是れ性天の眞境」外界が静かであつて心が静かであるといふのは、本當の静かではありません。動いてゐる中で、静かになるのが本當の静かであります。

性天と申しますのは人間の心を天地に例へまして、性を天とし、心を地とし、性天心地などといひ、こゝには此動中に静かさを得來つて、纒かに本當の心即ち性天の眞の境涯が見られるといふので、毎度申しますが、坐禅せば四條五條の橋の上

往來きの人をそのまゝに見て

大燈國師のは「坐禅せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て」これを天桂禪師が深山木に見るのは未だ覺つてゐないといふて「坐禅せば四條五條の橋の上往來の人をそのまゝに見て」とした方が良からうと云はれたといふ話がありますが、山の中に這入つて静かになる事は誰でもなれる、それを四條五條と云へば京都の賑かな處で誘惑の多い中で往來の人をそのまゝに見て心が澄んだといふ動中に静を得るのであります。さうでなければ眞の心、本當の覺りの境涯に至つたといふ事は出来ないといふの

て、動處に靜を得なければ性天の眞境は得られないと、かう申して居るのであります。これはやがて次の文句と比べますとよく意味が極まるのであります。

一簞の食一瓢の飲

「樂處の樂は眞の樂にあらず」樂しい處の樂しみは本當の樂しみではな  
い。「苦中に樂を得來つて、纔かに心體の眞機を見る」心の本當の働さを見  
る事が出来る。自分の境遇が樂しいから樂しいといふのでは境遇の變化に  
依つてこれは變つて行く。金を持つたから樂しいならば金が無くなれば苦  
しくなる、境遇の變化に依つて心が變化するのは眞の樂しみではない。如  
何なる苦しい境遇にあつても心の上にはニコ／＼として樂しみを以つて居  
るのが眞の樂しみであります。孔子は論語の雍也篇に顔回を譽めて

「賢なる哉、回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在つて人  
其の憂に堪へず、回や、其の樂を改めず、賢なる哉、回や」  
これは顔回といふ人が一簞、竹で編んだ小さな食器に入れた食物や、一  
つの瓢箪の水を飲んでそして生活をしてゐる。その生活は樂しいものぢや  
ない、けれどもその中に樂しみを得てゐるのは實に偉いものであると「賢  
なる哉、回や」と二度まで繰返して褒められてゐるのであります。貧しい生  
活といふものは決して樂しいものぢやありません。飢を凌ぐだけといふ事  
は樂しい事ではない。その苦しみの境涯にあつて樂しみを改めずといふ處  
に偉い處があります。物質的な樂しみを求める事は、物質の變化に依つてそ  
の樂しみが奪はれて行くのであります。精神的の樂しみといふものは、物  
質の變化に由つて變化しない。外界に依つて改められないのが本當の樂し  
みてなければなりません。



何處も火宅か

一休和尚が攝津の住吉に行きました折にお葬ひがありまして人が大勢泣いて随いて行くのを見て

来て見れば此處も火宅の宿なれや

何故住吉と人の云ふらん

住吉々々といふから餘ッ程住みよい處かと来て見れば此處も火宅の宿である。これを聽いて或老人が

来て見れば何處も火宅の宿なれど

心がすめばいつもすみよし

何處に行つても苦しみはあるけれども心さへ澄んで居れば何處も住吉であると申しました。更に一步進んで、

来て見れば何處も火宅の宿なれど  
たゞ何となく住めば住みよし  
といふのもありますが、前の——一休のいはれたのは境涯の苦しみによつて悲しいといふ意味を感じ、後の二つは境涯が如何にあつても心さへ澄んで居れば楽しいといふのであります。

盗り殘したる窓の月

越後の良寛といふ人は、非常に貧しい暮しをして居つても心は何時もある楽しい人であつて、或日良寛の處に泥坊が這入りましたが、何も、奪るものがない、つまらん處に這入つたものだと思つてゐると良寛が氣の毒がつて何もなからこれでも持つて行きなさいと着てゐる布子を一枚脱いでやりました。一枚切りの布子を持つて行かれても涼しい顔をして窓

の月を眺め乍ら

「泥坊のとり残したる窓の月」

明月清風を自分のものと見てゐる心が「泥坊のとり残したる窓の月」と吟ぜられたのであります。さういふ境涯にある爲めに外界の變化に自分の心の楽しみを改めるといふやうな事はないのであります。

足ることを知れ

どうすれば心の楽しみを得られるかとかう申しますと、これには先づ二つの方法があるのであります。菜根譚を通じて現はれて居ります方法に一つは足る事を知る、といふ事と今一つは心を大きく持つことです、人間の物質上に對する慾望といふものは、かうしたい、あゝしたいといふやうに限りがないから思ふやうにならなう。

物事の二つ叶へば又二つ

三つ四つ五つと六つかしの世や

苦しいと見るのは物事に満足を知らんからで足る事を知れば其處に心の安らげき處が見出されるのであります。

こと足れば足るに任せてこと足らず

足りてこと足る身こそ安けれ

即ち足る事を知つて安心の境地が開け、其處に精神上的の快樂が得られるといふ事でありませう。釋尊が遺教經の中に

「諸の苦惱を脱れんと欲せば知足を觀すべし。

知足の法は輒ち富樂安穩の法なり」

足る事を知るといふ事を示されて、かう仰せられて居るのであります。即ち我々の精神上的の樂を求めようとするならば足るを知るといふ事が一番で

「足るを知る者は身貧しけれども心富む、足るを知らざる者は身富むと雖も心貧し。」

これは支那の「傳家寶」といふ本の中に書いてある言葉であります。足る事を知れば身は貧しいけれども心は富んで行く。足る事を知らないならば身は富んで居つても心は貧しいものになつて行くといふ意味で云はれてゐるのであります。

心を廣く持て

さうしてもう一つの方は何であるかといふと心を廣くもつ事で、心を小さく持つから、其處に樂しみといふものは奪はれて苦しんで行く。自分の氣を小さくするから苦しいのでありますから心を廣く持つ、どういふ具合に廣く持つかといふと、例を擧げてお話致しますといふと名高い話であり

ますが、昔加賀に服部元好といふ醫者がありまして非常に達觀家でありました。何時も心樂しく暮して不平といふものを言つた事がない。處が不幸な事にはこの服部の家が全焼になつてしまつた。これは非常な境遇の變化であります。流石の服部元好も悲しむであらうと見て居りますと、何時もと變らないやうにニコ／＼致して居りますから、或人が、服部元好に

「お醫者さん家の黒焼何になる」

昔は黒焼を藥に致しましたので——今でもやつてゐますが——ソコで家の黒焼が何に藥にするつもりかと擲擲たのであります。これに對して服部元好は

「大工左官の腹藥、そして世上の氣付けにもなる」

成程世の人に火の用心を教へる氣付け藥にもなるし大工や左官の儲けにもなる、自分といふ小さな事に眼をつけず、世の中といふ廣い處に眼をつ

けて行きますと、其處に悲しみといふものがなくて心の樂しみといふもの  
 を持つて行く事が出来る、かういふやうに足るを知るといふ事と、心を廣  
 く持つといふ事とが我々の精神上の樂しみを得る一つでありますが、更に  
 もう一步突き込んだ根本は苦しみとか樂しみとかに囚はれない、それから  
 離れた處に心を置かなければならぬのであります。其處に眞の苦樂を超越  
 した處があるのであります。此處では苦と樂とを別に見ましてかういふ  
 教へを説いたのであります。參照の處に書いてある文句「晴天白日的の節  
 義」これはこの次の文句に關係して逆境順境といふ事をお話申します  
 時に譲ることにはいたしまして今日はこれで終ります。

第七講 逆境の恩寵

逆境ぎやくきやうの中に居まれば、  
周身しんみ皆みな鍼しん砭せん藥やく石せき、  
節せつを砥こぎ行ぎやうを礪かいて覺おぼえず、  
順境じゆんきやうの内に處あれば、  
滿前まんぜん悉ことごとく兵へい刃じん戈くわ矛ぼう、  
膏あぶらを銷かし骨ほねを靡たして知しらず。

居逆境中、  
周身皆鍼砭藥石、  
砥節礪行而不覺、  
處順境內、  
滿前盡兵刃戈矛、  
銷膏靡骨而不知、

【參照】

己れに返すものは事に觸れて皆藥石、人を尤むる者は念を動かせば即ちこれ戈矛。

逆境の恩寵

順逆二境

人間の一生を通じまして、順境と云ふて非常に都合が良く萬事思ふが儘になります時と、逆境と云つて物事が悉く鶻の嘴で食ひ違つて思ふに任せぬ場合とがあります。順境の場合はトン／＼拍子で進んで行き、誰も得意満面、意氣揚揚と喜んで居りますが、逆境の場合になりますと思ふに任せないものですから、元氣沮喪、意氣銷沈して塞ぎ込むのが、人間の常態であります。然し乍ら順境必ずしも喜ぶに足らず、逆境必ずしも憂ふるに足らないのであります。この順逆の二境に對しての我々の心得を示したものが、本日お話致します本文であります。

逆境の場合

始めは逆境に就いての場合を書きまして「逆境の中に居れば、周身皆鍼砭薬石、節を砥ぎ行を礪いて覺えず」即ち逆境の場合、思ふに任せぬ場合は身の周囲、自分の身の周りの凡てが、鍼と申しますのは金で造へた針、砭と申しますのは石で造へた針、薬は薬、石は温石のやうに腹を暖めるもの、つまり鍼砭薬石は病を療す器械なり、醫藥なりで、すべて病氣を療すものを總括して此處に鍼砭薬石と申しました。逆境の場合は周圍が皆自分の病を療す處のものであつて、それで節を砥ぎ行ひを礪いて行く事が出来るのに、それを人々は知らないのである、其の時はさうは思へないが、それがやがて身の薬となり節義を砥ぎ行ひを礪いて行く事が出来るのであるといふので、孟子が

天の將に大任をこの人に下さんとするや、必づ先づその心志を苦しめ其の筋骨を勞し其の體膚を餓すとあります。天が大任を下さんとすれば先づその志を試してその身體を苦しめて見るものである。即ち逆境といふ艱難は、天の自分を試練する處のものであると考へて行きますならば、逆境必しも悲しむに足らずで、この逆境の間に節を砥ぎ行ひを礪いて行けば、成功の門は開かれるのであります。

艱難を試練とす

昔山陰の麒麟兒と謂はれました山中鹿之助は三日月を拜みまして「三日月大權現何卒我に百難千苦を與へ給へ」と言ふて居りますから、傍の人が「一體神や佛を拜むといふのは苦しみや難儀の無いやうにと拜むのが人情

であるのに、お前は難儀を與へて呉れと拜ひのはおかしいぢやないか」と言ひますと、山中鹿之助は「大丈夫、艱難に遇はずんば以て我が力量を試すに足らず、我が力量を試めすべく難儀に遇ひたいと願ふのである」と言ふたといふ話がありますが、これは彼の熊澤蕃山先生の

憂き事の尙ほこの上に積れかし

限りある身の力試さん

と言はれた歌と共に有名な話として傳へられて居ります。「艱難汝を玉にす。」人は難儀に遇はずして節義を砥ぎ行ひを礪いて行く事は出来ないのです。カーライルの申しました言葉に「大きな石が道に横たはつて居るのを情者はその石を見て自分の行手を妨げる障物と見るが、勇者はこれは我が歩を進め足を運んで行く一つの段階であると見て進んで行く」とあります。艱難に遇つてそれを突破して始めて自分の成功の門は開かれる

のでありますから、この事は前回の参照の處に擧げて置きましたのも矢張り同じ意味に見る事が出来ます。「晴天白日的の節義は暗室屋漏の中より培ひ來り」晴天白日明かに現はれてゐるその人の節義といふものは、暗い家の部屋の中——屋漏といふのは部屋の西北の隅で最も暗い所——で養はれて來たものであつて「旋乾轉坤的の經綸は」乾坤は天地、旋轉はひつくりかへること、即ち天地がひつくり回るやうな大きな仕事は、その人が小心翼翼戦々兢兢として深い淵に臨むが如く、或は薄氷を踏むやうな用心の中から養つて來るのであるといふて居ります。これは前回申しました静中の修養を動處に得るといふ事にも應用してお話出來ますし、又明日お話する英雄の心がけといふ事に就いてもお話出來ますが、又此處には逆境の中に節義を礪く事を充分にして來たものと見ても宜しいのであります。



生を決する心

新井白石は小身より身を起し、遂に幕府の大官にまで上つた人であつて、その當時河村瑞軒といふ人がありました。この河村瑞軒は貧困の家から身を起して一代のうちに巨萬の富をこしらへた成功者であります。或る時、この瑞軒が新井白石に向つて「貴下が今日まで御出世なさるには随分艱難がありました。御座りませう」と云ふと、新井白石は「ハイ色々艱難を経まして三度まで死を決しました」と答へる。ソコデ瑞軒は「それは死を決したのではない生を決したのであらう」といひました。死ぬといふ事は易い、死は一旦にして易しであります。この死ぬやうな苦しい處に生を決して、能くこの艱難を突破する事が出来るのだから死を決したのでなく生を決したのであると申したのであります。此死中に生を決するやうな逆境の場合

は、自分の周囲は凡て薬であると考へて、我が生涯の爲めとして進んで行くの意志でなければならぬのであります。

逆境の危険

これに反しまして、逆境の場合には物事がトン／＼拍子に行くものですから、つい調子に乗りすぎるのであります。だからその逆境の場合を書きまして「順境の内に處れば、満前悉く兵刃戈矛」兵は武器、刃は刃、戈も矛も共にほこと訓じまして刃物であります。兵刃戈矛は悉く身を攻めるの武器であります。「膏を銷し骨を靡して知らず」順境の場合といふものは、目の前に現はれてゐる萬事が皆悉く自分の身を攻める武器であつて、皆な膏を銷し骨を靡してゐるのである。そんな事に氣が附かず萬事調子に乗つてやるのが人間であります。世界の歴史の興廢を見ましても、個人の盛

衰を見ましても、逆境にあつて成功して、順境にあつて失敗するといふ事は、古今の歴史に現はれてゐる事實であります。何も大きな歴史上の事を云はなくても、我々の短い一生を通じましてもさういふ事はあるのであります。古い川柳に「初鯉伊勢屋の門を通り過ぎ」昔、江戸へは多く伊勢から出て来て、逆境の中に苦しんで成功した人が多から「伊勢屋、稻荷に犬の糞」は江戸名物と呼ばれ、伊勢屋といへば齋齋坊とせられたので、それも初代は萬事儉約して江戸ツ子の高價なのを競つて食ふ初鯉など食べないから「初鯉伊勢屋の門を通り過ぎ」であります。處がそれは初代で、二代目になりますと親の心も知りませんで、然しまだ親父が頑張つて居りますから却々すぐ贅澤は出来ませんから「二代目のソツト呼び込む初鯉」或は「二代目の伊勢屋呼込む初鯉」二代目はソツト呼込む位ですが、三代目になると乳母日傘で育てられ、したい三味の順境にありますから、人の言ふ事に

乗つたり又自分が調子に乗つたり致しまして終ひに「賣家と唐様で書く三代目」で、零落をしてしまふのであります。

自己に顧みよ

斯くの如く順逆の二境といふ事に依つて我々の心が動かされますが、然し乍らその時順境にあつても逆境にあつても心の持ち方に依つてこの順逆二境に處して行く事が出来る。それを参照の中に「己れに反すものは事に觸れて皆薬石、人を尤むる者は念を動かせば即ちこれ戈矛」己れに反すといふのは反省する事でありませう。自分に省へりみてかういふ具合に處しては不可ん、こんな事をしては悪いと云ふて心に反省するといふものは、事に觸れて皆それが薬になるが、自分に反省する事なく、彼奴があゝ云つたから悪いんだ、彼奴が彼奴がと、人を咎める事ばかり考へて居る者は、

ヒヨイと心が動いても身を滅ぼすの刃となるものであります。

一葉の新聞も亦教訓

何時でも自分を先づ省へり見るといふ事をして、餘り人を咎めるといふ事をしないやうにしなければ、世を渡つて成功して行く事は出来るものではないのであります。若し身に反つて反省するといふ心であるならば、一枚の新聞を読みましても、我々の精神は修養する事が出来るのであります。悪い事の書いてある記事を見て、悪い奴だ悪い奴だ、と思つてしまへばそれだけです、彼奴は悪い、非常に悪いが儼も今はあゝいふ悪ひ事はしなけれども、若しヒヨイと心を動かせばあんな悪い事も爲兼ねない心を持つてゐるのであると自分に反省する。又美事善行の記事を見ても、あゝ偉い人だと見てしまへば、それまでですが彼も人なり我れも人なり、自分もあ

あいふやうに爲し得る可能性があるので、あのやうにやらなければならんと思ふと直に自己の修養となる、人の悪を見ては自身に反省して心を警め、人の善い事を見ては身を勵まして行くといふやうにしたならば、毎朝配達せられる一枚の新聞も修身の教科書となつて、我々を教へて行く事が出来るのであります。

成功者と失敗者

ところが人間といふものは、免角さういふ事を致しませんで、自分の都合の良い方ばかり考へます。よく私は人に申すのであります、世の中に成功した人と失敗した人の話は全く違つて居ります。成功した人は「我れは何が故に成功せしや」などと公表して自分の腕一本で成功したことを誇り顔に述べて居りますが、失敗した人は、決して俺の腕で失敗した、

とは申しません、「彼奴があゝ言ふたからかうなつた」又は「あんなことがあつたから、かうなつた」で、ツマリ「運が悪かつたのである」と申します。そこでその自分の腕で成功したといふ人を掴まへて、「お前は腕一本で今日の成功をやつたといふがそんなに一度に何時儲けたのだ」といひますと「それは戦争の折にうまくやつたのである」と申しますから、その戦争の折にうまくやつたといふ「その戦争はお前が始めたのか」といふと「いやそれは國が戦争を始めたんだ」といふ、それでは「國が戦争をやつた結果お前が儲けたので、お前の腕一本で儲けたんぢやない、國に儲けさせて貰つたんぢやないか」と申しますと「さう言へばさうだが其處が腕だ」と未だ腕だと言つて居ります。これに反して失敗した人に向つて「お前は運が悪かつたと言ふが實際どうだつたんだ」と訊くと、「實に運が悪かつた、あの時にあゝやれば良かったのにあゝやらなかつた」といふ、「それは誰がやらな

かつたのか」と言ふと「それは俺がやらなかつたんだ」と申します、「それは運が悪いんぢやないぢやないお前が悪いんだ」「さういへばさうだが、其處が運だ」とまだいつて居る。免角人間は物事を得手勝手に解釋する風がある。その得手勝手を離れて皆自分の身に省へり見て、成功した人は自分がかういふやうになつたのは直接間接に他の原因があるを見て、こゝに他に對する報恩の心を起し、又自分が失敗した場合にはそこに自分の悪い處があつたからだと言ひ省みて奮發激勵するといふ事が成功の因であつて、徒らに人を咎めて居つては決して成功するものではない。人生に順逆二境あり、此順逆二境にあつて心を動かさず超然として道を行つて行くのが大丈夫の修養であります、今はしばらくこれを分けて順境逆境と見るならば、逆境は皆我々の藥となるものであり、順境却つて我々の毒となり我が身を殺すの刃となるものであると云ひましたのが、これが本文

第八講 英雄の資格

第七講

の注意であります。

小處滲漏せず、  
暗中に欺隠せず、  
末路に怠荒せざるは、  
纔かに是れこの真正の英雄。

小處不滲漏、  
暗中不欺隱、  
末路不怠荒、  
纔是個真正英雄。

【參照】

聲妓晦景、良に従へば一世の烟花碍りなし、貞婦白頭、  
守りを失へば半生の清苦俱に非なり。

## 英雄の資格

### 人物評價の三標準

今日お話致しますのは、英雄といふものはどういふのが眞の英雄と云へ  
るであらうか。英雄評價の標準とも申すべきものは何であるか、又英雄た  
らんとする人は如何なることを心掛くべきかを示したものと見られるの  
であります。英雄の英といふ字は草の尤も優れたもので、雄は獸の尤も優  
れたものをいひます。これを人間に應用しまして人間の尤も優れた人を英  
雄と申すのでありますから、英雄の要素として挙げられましたこれは、直ち  
に人物評價の標準としても考へる事は出来やうと思ふのであります、即ち  
本文にあります通り「小處滲漏せず、暗中に欺隱せず、末路に怠荒せざるは、

「纔かに是れこの眞正の英雄」この小處に滲漏せず、暗中に欺隠せず、末路に怠荒しないといふ三つは眞の英雄の資格であると申すのであります。

細心の注意

第一の小處に滲漏せずといふ事は、小さな事を處理するに水が滲み出したり漏れたりするやうな手落ちのないやうに細心の注意を拂つてやるといふ事でありませう。兎角英雄と云へば大言壯語して「大行は細謹を顧みず」など申して小さな事には氣を附けないのが、眞相であるやうに謂はれて居りますが、これは眞の英雄ではないのであります。眞の英雄はそんな粗雑な事ではなり得るものではないのであります。三國時代の英雄でありました蜀の劉備が、その子を戒しめました言葉にも、「惡小なるを以て爲す事なかれ、善小なるを以て爲さざる事なかれ」

と申しまして、どんな小さな悪い事でもしてはならぬ、どんな小さな善い事でもしなければいけない、小さな事に氣が附かなければならぬ、とその子を戒しめて居るのであります。又日本が生んだ英雄としては先づ第一に豊臣秀吉、この秀吉の言遺したのであると云ひ傳へられて居りますものに、世の中の病氣を療すに三つの薬と四●の毒がある、三つの薬といふのは、

天を懼れ、

身を修め、

儉を守る。

天を懼れて疾しい事をしないやうにし、身を慎んで、儉約を守つて行く事が、この世の中の病を療す薬で、毒となるものは四つある。

私を爲し、

邪欲を思ひ、



物に怠り、

非義を行ふ。

この四つは毒であるから先きの三つの薬を用ひて、この毒を去つたならば國の病氣は療るものだといひ、又或は朝寝をするな、女に心許すな、物事に退屈するな、といふやうな色々小さな事迄數へて云はれたといふことが傳へられて居ります、もとより傳説ではありますが、これによつてわれ／＼はあの豪放不羈の英雄に、この細心の注意があつたといふ事を見ることが出来るのであります。

小事を忽にする勿れ

これは何も軍陣の間に立つて千軍萬馬の間を馳驅する英雄ばかりではありません。何事でも、成功しやうと思ふ人は小さなことを粗末にしないと

いふ事が、その第一であると思ひます。もとは獨逸人であると云ふこととてありますが、アメリカに参りまして一代に巨萬の富を致しました大成功者と謂はれるアストー、このアストーといふ人に「貴方が今日この様に御成功になつたのは貴方の勉強の力であるか」と訊きますと、「いや世の中には儂より勉強した者もあるが儂程成功しない」「それならば貴方は運が良かったのでか」といふと、「いや世の中には俺より運の良い者があるけれども儂程の成功はしない。」「それでは貴方が成功なさつたのは何ですか、」と申しますと、「唯小事を忽にせざるにあり」と申したといふことであります。小さな事を粗末にしないといふことが成功の秘訣であるのに、世の中の人には大きな事は大切にしてこれに注意するが、小さな事は「これ位の事は何でもない」と粗末にするから失敗を招くのであるといふ事を暗示したのであります。「法句經」の中にも、

「大悪もとより大ならず、小積より成る、小悪を軽んずるなくんば、殃なきを得ん、水滴微なりと雖も漸く大器に満つ」と申されて居ります。二宮尊徳先生も「大事を成さんとするものは、先づ小事を務むるがよい、大きな事は爲し難いが、小さい事は爲し易い、その爲し易い小さな事をせずして、徒らに大きな事の爲し難いを歎げくは小人の常である、大人物は先づ行ひ易き小さな事から行つて、終に大事を行ふものである、」といふて居られます。この小處に水の漏れないやうに細心の注意をするといふ事、これが英雄學の第一歩であつて、英雄たらんとする者は先づこれから踏出して行かなければならぬと思ふのであります。

人を欺かず

次に「暗中に欺隠せず」暗がりに居りましても、人に欺き隠くすやうな

事はしないやうにするといふ事、即ち「君子は屋漏に恥ぢず」で、どんな闇がりでも家の隅でも人に欺き隠くすことがないのが君子人で英雄亦斯くの如く、何時でも公明正大な心を持つて、第一講に申しましたやうに、青天白日の心懸けてなければならぬのであります。それを「英雄人を欺く」などと申して權謀術數を振り廻はすのは、決して眞の英雄ではなく、これは奸雄であり梟雄であるのであります。眞の英雄たる者は暗中に欺隠せず、欺むき隠くす事がないといふ事であればならぬのです。西郷南洲先生の遺訓として傳へられて居ります「人を相手とせずして天を相手として我が誠の足らざるを思ふべし」で、人を相手にするからいゝ加減や誤魔化しをする氣になる、人は見て居ない折もあるし、知らない所もある、しかし天は昭々として我々を照して居る、この天を相手にし我が誠の足らざるを思ふといふ心があつたならば、人を欺き世を欺くやうな心にはなれない

のであります。ワシントンをアメリカの大英雄であると數へる事は誰にも御異存ありませんが、ワシントンは自分の日常の修養の爲め、自は反省の規則を作りまして、其の中に「言行は常に良心に恥ぢざるを要す」といひ、又「努めて汝の心中に良心といふ天の光明を保て」と書いて自ら戒しめ、以て日々の行動を反省して行つたといふ事でありませぬ。斯てこそ眞に人の信服し得る英雄となる事が出来るのであります。其處で暗中に欺隠せずを英雄評價の一標準といはしたのであります。

英雄の末路

そこで第三であります。「末路に怠荒せず」末路といふ字の正當なる意味から申しますと、失敗した後の事でありませぬ。英雄一度回天の事業をしたが、事、志と違ひ、失敗をした、その時自暴自棄に陥り焼け糞になるとか、

或は意氣沮喪して、徒らに悲觀に耽るとかといふやうなのでは眞の英雄とは云ふことが出来ませぬ。歴史を讀みまして痛切に感ずるのは、英雄の晩年であり、其の末路であります、これも一個の英雄とは算へられて居りませぬが、英國のクロムウエルの如きは末路は未だ失敗には至りませなんだが、其の煩悶懊惱の狀は實に氣の毒なもので、何時刺客に見舞はれるかも知れないといふので、何時も多くの警護を左右に置き、夜は毎晩寢床を變へて、しかもおち／＼眠られなかつたといふ事でありませぬ。或人がクロムウエルが馬上に兵隊を指揮してゐるのを見て、當年のクロムウエルの颯爽たる面影は今見る事が出来ない。全て死人が馬に乗つて居るやうな感がすると、評した程、顔色憔悴、意氣沮喪して居つたのであります。

ナポレオンと石田三成

その點に參りますとナポレオンは事志と違ひ、終ひにセントヘレナの孤島に流竄の身となつたのでありますが、始こそ焦燥煩悶も致したやうてありますが、後には深く宗教に歸依いたしましたして、「神は我が祖國の爲めに盡す自分を護つて下さつて居る、自分は今、病氣で死んでも、彼の靈の世に於て自分の爲めに忠誠を盡して先きに死んで呉れた多くの將士に遇ふ事が出来るのである」と頗る安心の狀がありました。これを傍に居ります醫者——これはイギリスから附けられて居たのですが——その醫者が嘲笑ひまして、英雄ナポレオンもかういふ事を言ふやうになつたかと申しますと、ナポレオンは「庸醫は唯だ藥を調合すればよいのだ、永遠に生きんとする英雄の心事は汝等輩が知る處でない」と痛罵したといふ事であります。此處にもナポレオンの本領を見る事が出来やうと思ふのであります。このナポレオンの話に就いて思ひ起されますのは、我が國に於きまして、彼の關

ヶ原の戦ひに乾坤一擲の大仕事をやりました石田三成の事であります。關東關西分け目の戦ひ、不幸にして石田三成は失敗いたしましたして、捕はれ身となり、首を斬られるために、護送せられて參ります途中で「非常に渴を覺えましたから警固の武士に「喉が渴いて來たが何か飲み物はないか」と云ふと、「こゝらあたりには水はありませんが私は此處に柿の甘干しを持つて居りますからそれを差上げませう」と申しますと、三成が「わしは痰を病んで居る、柿の甘干しは痰に毒であるからお断りする」と申しますと、警固の者が「今首を斬られるといふのに毒忌みをする事は可笑しいぢやないか」と笑ひますと、三成は「大丈夫は一旦大事に志す以上は、死ぬ迄その志を遂げやうとして居るのである。死ぬ迄は大切な身體だ、此心は汝等輩の知る處でない、燕雀何ぞ鴻鵠の志を知らんや」と云ふたといふ話

が傳へられて居ります。彼れも亦末路に荒怠せずといふべきであります。

大楠公と文天祥

それよりも更に其の末路に於て人を感憤興起せしむるものは日本の大楠公楠木正成と、支那に於きましては宋の文天祥を擧げる事が出来やうと思ひます。大楠公が「七たび人間に生れて國賊を亡ぼさん」と湊河に於て自刃せられた盡忠至誠の精神は百世の後、何人も感ぜざるものはなく、其の身のために君を思へば二た心

君のためには身をも思はじ

と、その氣節は今更ら申上げる迄もなく皆様御承知の事でありますからこゝには略しますが、宋の文天祥は將に倒れんとする宋室を護つて幾多の苦心を致しましたが、事は志と違ひ、其の敵たる元の爲めに捕はれの身となりました。その折に元の大將が云ふのに「天下の大勢はもう定つた、お前が宋

の國を起さうとかいつても、最早如何とも爲し難いこと明かである、それに命懸けて働くのは無駄ではないか、と文天祥を嘲りますと、文天祥は「醫者が手を離してもう死ぬと定つたからとて親の病氣に對して藥を勧めるのが子たる者の道ではないか、今宋の國が亡びるときまつて居るからとて、黙つて見て居れるか、如何かしてこれを興さんとするは臣たる者の道である、我れはたゞ臣子の分を盡すのみ」と申しますと、敵將はかう云ふた、「さうは云はるゝが、如何に命懸けて宋の國の爲めに盡くして見ても、宋の國は終に亡びる、國既に亡びたら誰も其の盡力を書き遺して後世に傳へる者もないではないか」と申しますと、文天祥は「いや我れは名を遺す爲めに盡瘁するのではない、書かれる書かれないは問ふ處でない」と申したといふこととあります。こゝに末路に毅然たる英雄の風格を見る事が出来るのであります。

## 晩年の清節

これは失敗して逆境に立つた英雄の末路の状態でありませうけれども、成功致しまして順境に居る英雄としても、その晩年に至りますと矢張り行ひが荒み怠られました、晩年を美しくする人が少いので、功成り名遂げて荒怠せざるものは稀れであります。これは英雄ばかりではありませぬ、凡ての人も成功する迄は一生懸命に心が緊張して行きますが、一度成功すると心が弛んで怠荒に陥る人は尠くないのであります。参照の處に書いてあきましたのは、英雄に對して美人を擧げたので、「聲妓晩景、良に従へば一世の胭花碍りなし、貞婦白頭、守りを失へば半生の清苦俱に非なり」聲妓といふのは歌舞音曲に携はる藝者のやうな女であります、これが後に良い亭主を持つてその家を護つて正しく身を保つてゆきませすれば一生の胭

花即ち白粉嗅い花やかなる巷に居つた事は何の妨げにもなるべきものではなく、却つてあゝいふ商賣柄に似合はん人だと褒られるのであります。又その反對に貞婦淑女と謂はれた人も白頭と歳が寄つて頭に白髪が混る頃になつて不倫な行ひをして守りを失ふやうな事があつたならば、半生の清苦と清い苦しみも俱に非なりで、何にもならぬことになつてしまふと申しましたので、まことに現代有閑夫人の頂門の一針となるべき訓誡であると思ひます。

されば人を評するには、その前半生だけでなく、後半生をも見て行かなければならんといふ意味を申すので、これは英雄も美人も、否な凡ての人間に當てはまるべき訓誡でありまして、一生を通じて見なければ、其の人の眞價は判らぬものでありまして、特に晩年の注意が最も必要であるのであります。

第九講 世を渉るの術

巧を拙に藏し、  
晦を用ひて明にし、  
清を濁に寓し、  
屈を以て伸と爲す、  
眞に世を渉るの一壺、  
身を藏すの三窟なり。



藏巧於拙、  
用晦而明、  
寓清於獨、  
以屈爲伸、  
眞涉世之一壺、  
藏身之三窟也。

【參照】

己れが心を味まさず、人の情を盡くさず、物力を竭さず。

世を涉るの術

誇る心と嫉む心

第一講に申しました通り、この菜根譚はいろ／＼な聖典の思想を咀嚼して自分のものとして、洪自誠といふ人が書き集めたものでありまして、殊に世渡りの上に就いて適切なるやうに示したものでありますから、道德の眞つ正面から行きますと少し手ぬるいやうな點があり、狡いと思はれるやうな處がないとは云はれないのでありますけれども、それは人情の弱點といふ事を見まして書かれたものでありますから、誤解のないやうに此菜根の味を咬みしめて、その意味を考へる事が最も必要であります。特に本日は話致しまする處はこの點が著しく現れて居るやうに感ぜられます。

即ち本文に「巧を拙に藏し、晦を用ひて明にし、清を濁に寓し、屈を以て伸と爲す、眞に世を洗るの一壺、身を藏すの三窟なり」からあるのであります。巧を拙に藏すといふ事は巧は巧み、上手といふ事で、兎角人間といふものは自分の上手な事、巧い事を誇り顔に吹聴したがるものでありますし、又人といふものは他人の巧い事、上手な事を、嫉み妬むといふ弱點があるものであります。自分に誇る弱點があり、人には嫉むの弱點が有るものでありますから、成可く巧いとか、上手とかいふ事は、外に出さんやうに、誇り顔をせぬやうにしないと世渡りの上に非常な損を招く事があると、いふのが第一句であります。實際その弱點は誰にもあります事で、美人などは自分の美しい事を自慢しやうと美しい上に美しくして、人に誇らんとする傾向があります。さうすると他の人は決してそれを褒めないのです。特に同性即ち女同志となりますと、これを褒めるといふ事は實に少

いのであります。シヨウベンハウエルが「女に女を褒めたからとて決して賛成するものではない」と申しました。「あの奥さんは別嬪ですね。」といつても、「ハアさうです」と返事をするものは少く、大抵は「別嬪は別嬪ですけれど、少し鼻が高過ぎます」とか「背が低く過ぎます」とか何等かの弱點を見出さねば心安からざるやうに思はれるものであると云つて居ります。實際自分に近い者程嫉む心が起るものでありますから、特に同じ仕事の人々の間などでは自分の巧い事、上手な事を誇り顔にせず、これを深く心中に潜めて置いても、實力さへあれば何時でも出して使へるのであり、又いつかはそれが明かに出て行くものであつて、自分からそれを誇り顔して誇らずとも終に「桃李もの云はずと雖も自らそのほとりに露をなす」ものであります。これが第一の句。

清を濁に寓す

第二は清を濁に寓するといふ事は、自分の清廉潔白といふ事は非常に良  
い事であるけれども、自分の周囲のものが全部濁つて居るのに自分だけが  
清廉潔白を誇りますと、終ひにそれらの爲めに排斥せられるの憂ひがある  
のであります。でありますから自分の清い事は持つて居つても、濁りの中  
に居る時には暫らく身を屈して、身を屈めてその濁りの中に寓居と假住ひ  
して行きます。さうして次第に自分の清き心を以つて周囲を清めて行くとい  
ふことになれば、これは餘程偉いのですが、それほどに至らずとも、蓮  
が泥中にあつてその花を清らかに咲かせるが如く濁りの中にあつて自ら清  
きを守つて居ることは必要であります。これには清きを外に伸ばさず、し  
ばらく屈して、而して伸びるの道造つて行くといふやうにせねばならぬ

のであります。

屈原と漁父

これに就いては有名な楚の屈原が作りました「漁父の辭」といふのがあ  
ります。楚の屈原といふ人は楚の國の王族でありまして、三閭の太夫とい  
ふ高位大官にまで昇り、一國の政治を自ら執つて居つたのであります。が、  
元來清廉潔白の人でありますから、他の役人輩に忌み嫌はれ、終に讒言に  
よつて排斥せられて、邊鄙の地に流されたのであります。そこで屈原は非  
常に煩悶致しまして寔れ果て、顔色憔悴形容枯稿とありますから、いたま  
しい姿をして河の畔を歩いて居りますと、一人の漁父が屈原を見て、「貴方  
は三閭の太夫さまでござらぬか、そんな身分のある方が何故こんな河畔  
をそんなに寔れ果て、お歩きになつてゐるのでござりますか」と尋ねます

と、屈原は、「世を擧げて皆濁れり、我獨り清、衆人皆醉ふ、我獨り醒む」世の中は皆な濁つて俺だけが清い、世の中の人皆は皆な酔ふて居るが、俺だけが醒めてゐるものだから身に災ひを受けてかういふ流竄の身となつたのである」と答へますと、漁父が言ふに「聖人は物に凝滞せず、よく世の中と推しうつるといふ、世の中が皆な濁つて居れば何故貴方は濁りを以つて波を上げてお行きなさらんのか、世の中が皆な酔ふて居ればその残り酒だけても飲んで居りなさらんのか」と申しますから、屈原は「考へても見よ、新たに髪を梳つたものはその冠をかひるに塵を拂ふぢやないか、新たに浴みしたものはその着る着物の塵を拂つて着るぢやないか、この清廉の身を以つてあの塵だらけ埃だらけの中にどうして居られやうか、そんな濁つたものと一緒に居る位ならば、寧ろ此河の中に飛び込んで死んでしまつた方がよい」と申しますと、漁父は高らかに梶を敲いて、

滄浪の水、清めば以つて我が纓を洗ふべく、滄浪の水、濁れば以つて我が足を濯ぐべしと謳つて去つてしまつたといふのであります。滄浪といふのは河の名であります、河の水が清ければ冠の紐を洗つたら宜からう、河の水が濁つて居つたならば我が足を濯げば宜いではないか、何故清めば清むでこれに應じ、濁れば濁つたやうに使へばよいではないかとの意味で、屈原は自ら此「漁父の辭」を書いて居るのであります。が、どうも漁父のいふやうな氣持にはなれなかつたと見えまして其身の潔白を保つために汨羅の河に身を投げて死んでしまつたのであります。屈原は清廉潔白であるけれども、世を巧く渡つて行くには、漁父の言ふたやうに濁れば足を濯ぎ、清ければ冠の紐を洗ふといふのが、この菜根の主義であります。

一壺と三窟

さればこれを世を渉るの一壺、身を藏すの三窟と申して世を渉るの術として授けたので、一壺と申しますのは鶉冠子といふ支那の古い書物に「中流に舟を失へば一壺も千金なり」と云うてありまして、壺といふ字は壺といふ字でありますけれども、こゝでは土で造つた壺ではなくて、瓢のやうなもの半分を切つて物を入れる道具といつたのを壺と云ふて居るのであります。だから中流に舟がひつくり返つた時には一つの瓢の壺も身を救けるの道具となる。

世の中を渉りくらべて今ぞ知る

阿波の鳴戸に波風はなし

と云はれたやうに世の中を渡るにはこの一つの瓢のやうな浮袋が要るので

はないか。三窟と申すのは戦國策といふ書物に「狡兎三窟あり」といふ事が書かれてゐるのであります。狡兎とは狡い兎といふ事で、狡い兎といふものは獵夫に追はれた時の用意に、初めからちやんと逃げ場所の穴を造へて置く。第一の穴が見つかれば第二の穴、第二の穴が見つかれば第三の穴、といふやうに始めから用意がしてある。世渡りするにも巧を拙に藏し、清を濁に寓して行くのは丁度狡い兎が造へてゐる三つの逃げ穴のやうなものである、とかう申したのであります。これは世渡りの上から説かれた言葉であります、参照を御覽下さい。

情に縛るな

参照の方に「己れが心を味まさず」と第一句にあります。かういふ汚れた世の中に居つても、自分の心を味まさんやうにするといふ事が第一必要

であります。これは先般から屢々申して居ります如く、我が心を清き鏡のやうにして行けば、鳥來たれば鳥映り、花來たれば花映り、花去れば影なく、鳥去れば又影なしで、來るに任せ、去るに任せて、少しも心を味まされぬこととあります。これは自ら修むるの道、次の二句は他に對する心得で、人に對しては「人の情を盡くさず」とあります。これは人をして其の情を盡くさしめぬといふ意味で餘り人の同情に絶つて其の極端まで盡くさせやうとする事は間違ひである、人の同情を餘り盡くせず、自分の方も亦其の人に同情して行くといふ事を忘れてはならんといふ意味であります。兎角人間は人の同情に絶らんとして、終にはそれに慣れて「あの時にあの位して呉れたから、今度はもう少しして呉れてもいゝぢやないか」「この位の事はあの人には何でもないと自分の身勝手から他人の情を盡くせしめやうとして、終に他人を困らせるに至るものであります。それでは

人に厭かれて、世を涉るに困難を生ずるのであります。この自分勝手を振りすて、他を思ひ遣るといふことが必要でありますのに、人間といふものはどうしても自分といふものには思遣りが有り過ぎるほどありますが、人には思遣りの少いものであります。だが世の中といふものが何で持ち合つて行くかといふと、互の思遣りの心こそ人生を結びつけて行くもので、身勝手からその他人に情を盡させるやうな極地に迄到らんやうにしなければならぬのであります。この思遣りの心が人間の世の中を結びつけて行く事は今更ら申す迄もない。一杯の飯を分けて食ふやうな家でも親が子を思ひ、子が親を思ひ、親子兄弟が思ひ合つて行くならば、その家庭は春風の吹くやうな美しい家庭であつて、金殿玉樓、富、巨萬を積む家庭に於いても、この思遣りの心がなかつたならば、その家庭は秋風の吹くやうな冷たいものとなつてしまふのであります。この思遣りの心こそ人と人とを結び

つけるものであります。

同情の擴大

若し夫れ更に此の心を擴充して野を馳ける獸、空飛ぶ鳥にまで及ぼして行く所に人の心の美しさはあるのであります、まして自分の家に飼つてある牛や馬にも思遣りをかけて行くは申すまでもありません。否、家に飼ふ牛馬や、野を馳ける獸、空飛ぶ鳥だけではない、野邊に咲く一本の花、峰に生うる一本の松に迄、思遣りをかける處に自然に對する興趣は油然として湧き出るのであります。

朝顔に釣瓶とられて貰ひ水

と加賀の千代が吟じましたやうに小さな朝顔に迄思遣りをかけた處に、美しい人情が流露するのであります。唯斯くの如く動物とか植物とかいふ生

命のあるものだけではない。自分の家に使つて居る器具に對してこれに思遣りをかけて、女の方ならば嫁入りの時、この箆笥は持つて來たのである、これ迄幾年の間我が爲めに用を足して呉れたものであると思へばこれを疎末には出來ず、一丁の鋏でも、物差でもこれはいつから我が手元に働いてくれたと思ひやりを以て見れば、そこに無限の歴史があり、無限の趣味があり、一つの辨當箱に對しても、これは自分が役所へ勤め出した折から今迄使つてゐるのである、と思へば其處に愛着の念が起つて來るのであります。凡ての物にその思遣りをかけ萬物に對して思遣りをかける、かうなると自分のものだからと云つて使へるだけ使へと亂暴に使ふやうなことがなくなりません。これを物の力を竭さすといふので、此處に物とありますのは人間以外の物全體を指したのであります、それを無駄に使つたり酷使虐待するといふ事があつてはならん。どんな品物に對しても酷使虐待する、

俺おれのものだからいゝといふ事ことはないのであります。その物ものの力ちからのあるだけ  
 を盡つくさせないやうにする事ことで、これが人ひとに接せつし物ものに應おこじて行く心こころ得えである  
 といふ事ことを示しめしたので、先まきの一壺いっこん、三窟さんくつは消極せうきよく的てきの教訓けうくん、こゝに己おのれが  
 心こころを味あじまさず、人ひとの情なさけを盡つくさず、物力ぶつりきよくを竭つさず、とあるのは自分じぶんがこの世  
 の中なかに處じよして往ゆく上うへに積極せききよく的てきに愛あいを擴充くわくじようして行く道みちであると思おもふのであり  
 ます。尙なほ人情にんじやうの事ことに就ついては明日あふうにちお話はなしすることにいたします。

第十講 人情の通患



饑<sup>うえ</sup>れば則<sup>すまは</sup>ち附<sup>つ</sup>き、  
飽<sup>あ</sup>けば則<sup>すまは</sup>ち颯<sup>さつ</sup>り、  
煖<sup>あたたか</sup>なれば則<sup>すまは</sup>ち趨<sup>ほし</sup>り、  
寒<sup>かん</sup>なれば則<sup>すまは</sup>ち棄<sup>す</sup>つ、  
人情<sup>にんじやう</sup>の通患<sup>つうくわん</sup>なり。

饑則附、  
飽則颺、  
燠則趨、  
寒則棄、  
人情通患也。

【參照】

千金結び難し一時の歡、一飯竟に終身の感を致す。

人情の通患

人情通じ難し

凡そ世の中に何が解らんと申して、人間の心程解らんものはないのであります。自分で自分の心を考へましても、昨日の心今日の心と毎日々々移り變つて行く

移り行くはじめもはても白雲の

あやしきものは心なりけり

人情の通患

人間の心は自分で自分の心が解らん程でありますから、況して他の人の心が解るものではないのであります。かうだと考へても、さうでなかつた事があり、さうだと思つても、或はさうでなかつた事もあるのであります。

たしかヴィクトル、ユーゴーですか、

世にも怪しきものは海なり、海よりも怪しきものは空なり、空よりも怪しきものは人の心なり。

と申しましたやうに、人の心ほど怪しきものはなく人情程通じ難いものはないのであります。「假名世説」といふ本に京の五條に住居せる風之翁といふ人がありまして、「凡そ人情といふものは通じ難いものである。例へばもう困り切つて少しの金があれば死なねばならんと云うて来る人があるに、それが本當に死なねばならん程のことならば、どんな工面をしても貸してやるが、世の中にはさういふ事を言つて、人を欺く者があるからまあ斷つてしまふ。さうして若しその人が死んだといふ話を聞いたとすると、あれが本當であつたらどうかしてやれば宜かつたにと思ふのが人情である。人間の世に偽りといふ事がなかつたならば、頗る簡單であるけれども、

偽り多き世の中で本當の事と信じ切れないから、さまざまに通じ難いことが生ずるのだと申して居ります。古い狂歌にも

死んだならたつた二分だといふだらう

生きて居つたら百も貸すまい

といふのがあります。たつた二分の金で死んだというて嘲り笑ふだらうが、生きて居つたら百文の金も貸して呉れないのが人情、一體人間は何う考へて交つたらよいか、善い人と思つて信じて使つて居ると飼犬に手を咬まれるやうな事があり、悪い人と思つて警戒するとその爲めに却つて善いものを悪くしてしまふ事があります。そんな解らない人間が寄集つて出来るのが、人の世の中といふものでありますから、世の中は實以つて解らないのであります。

善いか悪いか

世の中を悪いと決めてかゝるか、善いと決めてかゝるか、即ち哲學者に二つの見方があつて、此の世の中を善いもの、楽しいものと見る樂天論的で行くか、悪いもの、苦しいもの、厭ふべきものと見る厭世論的で行くか、これは何方とも決められませんが、例へば電車や汽車に乗りました場合、混み合つて居ります折に、「マアおかけなさい」と席を譲つてくれる人があると「渡る世間に鬼はなし」と人情は美しいものだと思ふのがこれも人情であります、坐つた拍子に懐中の裏口でも掏られて居ると「人を見れば泥棒と思へ」と考へる。渡る世間に鬼はなしと見るのも一つの見方でありますが、人を見れば泥棒と思へといふのも亦人間の世の免れ難い一面であります。人間の世の中はブライト・サイド、即ち光明面と云はるゝ輝い

た美しさ方面もあります、又ダーク・サイド、即ち暗黒面といはるゝ暗い厭ふべき方面もあるのであります。

人情の悪い方面

本文は其の悪い方面たる人情の通患を見ましたので、通患と申しますのは、おしなべて患ひとなるべきものであります。それを擧げまして「餓れば則ち附き、飽けば則ち馳り、燠なれば則ち趨り、寒なれば則ち棄つ、人情の通患なり」と申したのであります。腹が空つて生活に困るやうになつた人はよく人の處へ附いて來るのであります。「何處か職口はありませんか」「私は其の日の生活に困つて居ります」と僅かな知邊を辿つても、人の處へ附いて來るものであります、さてその人が職業の口でも出來、段々に都合がよくなつて來ると、即ち飽けば則ち馳りて、馳るといふのは紙

が風で吹上げられるやうに、付け上つて、昔世話になつた人の事を忘れて少しも出入りをしなくなる。「彼奴も、この頃來なくなつたが少し工面が良くなつたらう」といふやうになるものですが、これは未だ良い方で、甚しいのになると自分の困つた折の事を知つて居るから、自分の昔を云はれるかと思つてその人の處に近附かないばかりでなく、却つてその人の悪口をいふやうな傾向迄生ずるのが人情の悪い所でもあります。燠なれば則ち趨る、燠といふ字は暖といふ字と同じ意味であります、燠が暖くなる處へは人が皆縋り附いて行くのであります。それは序に此方の懐具合も暖めやうといふ淋しい根情で附いて行くのですが、その人の懐具合が寒くなつて少し具合が悪くなりますと皆棄て、顧みないやうになつてしまふ。昔からの諺に「他人の食ひ寄り、親の泣き寄り」といふ言葉があつて、利益のある處には人が兎角集つて來ますが、親類といふものは、血筋を引いて居

るから據なく葬式とか、法事とか、悲しい折にのみ集るものだといふ皮肉であります。寒山詩の中にかういふ事を書いた詩があります。

城北仲家の翁

彼の家に酒肉多し

仲翁婦死するの日

弔客堂奥に滿つ

仲翁自身亡し

能く一人の哭するなし

他の盃嚙を喫する者

何ぞ太だ心腹を冷かにする

といふのであります。「城北仲家の翁、彼の家に酒肉多し」で非常に派手な暮しをして居つて、酒や肉の多い家があつた。其處の奥さんが亡くなつた時にお悔みに行つた連中、お通夜に行つた連中で家中一杯になつた。處がその家の主人が死んだ折には「もうあそこの家もあの人が死んちや駄目だ」と云つて一人も行く者がなかつた。實に他人の家に食物に依つて集るやうな連中の心の淋しさに驚いたといふ意味であります。これが實際人情の尤

も悪い方面で、燠なれば則ち趨り、寒なれば則ち棄つといふのが即ち人間の通患であるのであります。これ迄は人情の悪い方面ばかりを見て來ました。然し乍ら人情果してさういふ悪い處のものばかりであらうか、人間は唯利益に着くだけのものであるかどうかどうであるか。

人情の美點

参照の處に説いてありますのは「千金結び難し一時の歡、一飯竟に終身の感を致す」で、千金といふのは恵みの尤も多きものであります。恵みの尤も多き千金の金をやつても一時の歡心をも得られない事もある。金さへ出せば交りが結べるかと思ふとそれは大違ひで「一飯竟に終身の感を致す」で、一飯の飯といふのは尤も恵みの小なるものであります。その小なる飯を食はされた事でも「生涯あの時の御恩は忘れる事が出來ません」、「あの人の

爲めならば身を棄てても何かしやう」といふ考へが起ることのあるのが人間の情であります。昔、吳起といふ將軍がその一兵卒の腫物が出來て、膿汁を吸ひ取らなければならぬといふ時、誰もこれを吸ひ取つてやる者がなく、それを將軍吳起は自ら吸ひ取つてやりました。それを聞いてその兵卒の母親が大きな聲をあげて泣き叫びましたから、或人が怪しんで、「お前の息子は一兵卒ぢやないか、その一兵卒の腫物を大將軍が膿を吸ひ取つて呉れたならば喜んでよいのに、何を悲しむて泣くのか」といふと、その母親が「私の亭主も兵隊に出てあの將軍の下に居りましたが、矢張り腫物が出來た折に將軍がその膿を吸ひ出して下さつた爲めにあの將軍の爲めならば命は惜しくない」と終に討死をしてしまひました。私の息子も將軍からあゝいふお取扱ひを受けたならば命を棄てるに決つてゐるから泣いたのである」といふたといふ名高い話があります。「人生意氣に感ず、功名誰か復た論ぜん」

て、人間といふものは利にのみ集るかと思ふと大きな思ひ違ひであります。恩に着せられた千金よりも、真心から呉れます一杯の飯の方が人間は感じて行くものであります。此處に人間の美しい處がある、善い處がある。これを見逃す事は出来ないであります。人間は一方には神に似通ふ綺麗な心を持つて居りますが、又一方には獸と相距る事遠からざる醜い心を持つて居るものであります。その悪い方だけを見て人情は斯くの如きものなりと決めるのは、人情の機微に到達したものではありません。千金を恵んでも一時の歡を得る事も出来ない、一飯の恵みを受けてもそれを生涯忘れなるといふ事になるのは、其處に人間の美しい處があるからであります。

畏服、利服、心服

凡そ人を服しますにはいろいろの法があります。第一は力を以つてその

人を畏服して行く。いふ事をきかなければ打つ、殿るといふやうな力を以つて畏服しましたのは、已むを得ず一時は服するかも知れませんが、これは心から服したのではありませんから、その人の力のある間は服して居りますけれども、力が少し衰へれば直に反抗するのは寧ろ當然の勢ひであります。それならば現代の世の中のやうに金さへやれば、人は服するものと利益を以つて服さしむるのも一時の方法でありますけれども、利を以つて集る者は利を以つて離れるで、孟子の「王何ぞ必ずしも利を云はん、唯仁義あるのみ」で仁はおもひやり、義は宜なりで、正しき心であります。この心を以つて始めて人と人とが結ばれるので、「百圓やるから俺の味方になれ」というて服した者は若し他から「千圓やるから味方になれ」と云はれればその方に行くに決つて居ります。そんな頼りない心を以つて人と人とが結ばれるものではない。俺が俺がといふ自分といふ我見は氷のやうな

もので、人と相和合する事は出来ませんが、この我見といふ障壁を撤廢して向ふと自分とを一つにするといふ思ひやる心、この心があれば何の利益もなくとも、その人の爲めに命を棄てるといふやうにもなつて來るのであります。これが即ち人情の美しい所でありまして、先日來度々引用いたしました、豊臣秀吉が未だ木下藤吉郎と云はれた昔、僅かな俸祿でありましたから其の家來も二三人に過ぎないのですが、その家來の中には「こんな主人では生涯うだつの上る見込みはない」と考へて暇を呉れと申すものがあります、大抵の主人は暇を呉れといひますと、腹を立てるものですが、秀吉は「さうか儂も僅かな知行であつて、お前方に充分な手當をする事が出来なかつた、どうか、よい主人を見つけ出して充分に出世して呉れ、今までわしのやうなものを主人としてよく働いて呉れた御禮の印に別れの茶の湯をやらう」と自分が主人となつてその家來をお客として丁寧な持て成

し、さて「縁あつて主従となつたが、今別れて他へ行つても、若し思ふやうにならなかつたら、何時でも俺の處に歸つて來い、元々通り使つてやる」と云うたので、その言葉に感激して秀吉の下を去らうと思つた者も、思ひ止まる者があり、中には出てゆきましても、復た秀吉の下に歸つて來て、彼に忠勤を勵んだといふことであります。此の爲めに秀吉は僅かな俸祿を貰つて居る時にも、自分の爲めに命を棄てるといふ家來を持つて居つたといふ逸話が傳はつて居ります。人と人と結ぶには力ではない、力を以て服する畏服でも、利祿を以て誘ふ利服でもない、心と心の解け合つた心服といふ事で、これで始めて人と人とが結びつけられるのであります。「まごころ」と「まごころ」との結合ほど美しいものはありません。これは人間の立派な處でありまして、この點をも見ずして人情が悪いと云つて咎める事のみ考へて自分は果してその人に對して眞心から、その人の爲めに施



第十一講 衣冠と人物

第十講

した事ことがあつたかと、自分じぶんの行爲かうゐを反省はんせいしてみるならば、餘りあまに人情にんじやうの惡わるいといふ事ことを咎とがめるよりも、自分じぶんのその時ときの心持こころもちを考へてみて自己反省じこはんせいに供きやうするといふ事こと、それが必要ひつたふではなからうかと思ふのであります。

我れ貴くして人これを奉ずるは、  
此義冠大帯を奉ずるなり、  
我れ賤くして人これを侮るは、  
此布衣草履を侮るなり、  
然ればもと我れに奉ずるにあらず、  
我れ胡ぞ喜となさん、  
もと我れを侮るにあらず、  
我れ胡ぞ怒と爲さん。

昔、信濃の俳諧師の一茶が江戸の有名な宗匠の處へ尋ねて参りました。處が一茶の服装が如何にも穢いので、玄關拂ひを喰はせて、どうしても會つて呉れません。一茶は已むなく手土産に持つて來た蕎麥粉に「信濃には蕎麥と佛に月夜かな」の一句を添えて差し出し、すごくと歸りました。宗匠はそれを見て、さてはあの名高い一茶であつたか、と追ひかけやうとしましたが、もう及びません。その宗匠は非常に痛み入りまして、其の後信濃に参りました序に、わざ／＼廻り路して一茶を柏原の草庵に訪ねやうと致しました。一茶は面倒と思ひましたか、庵室を閉ぢ一句を残して出て

# 衣冠と人物

## 外觀の世の中

我貴而人奉之、  
 奉此峩冠大帶也、  
 我賤而人侮之、  
 侮此布衣草履也、  
 然則原非奉我、  
 我胡爲喜、  
 原非侮我、  
 我胡爲怒、

行つてしまひました。その句は

俳諧の殿様これへおなりかな

で、暗にその俳諧師が、如何にも殿様然として、風流の趣味に疎く服装を見て、人の待遇を上下するのを冷笑致したといふ話が傳はつて居ります。兎角人間といふものはその表面に現はれたる服装を見まして人を評價致します傾きがありまして、それで此の俳諧師のやうな失敗を招くのであります。特に現代はこの表面の世の中、外觀の世の中で、着物や、持ち物や、或は肩書に依つてその人の品定めを致すものであります。宿屋などに参りましても、服装の良し悪して部屋が違ひ、さて其の部屋に通してから宿帳といふ事になつて、従何位、勳何等といふやうな肩書でも書きますと驚いて、「どうぞ此方へ」、「今彼方の部屋を掃除致して居りますから」などと見え透いた事をいふ例は屢々あるのであります。これは現代の一つの

通弊でありまして、服装や持ち物さへ立派であれば偉さうに見えるものから、御婦人などは全財産を身體に着けて歩かれるといふ風で、昔も今も異らぬ此の弊風を戒しめましたのが、本日お話致します榮根譚の本文であります。

衣冠の尊卑

「我れ貴くして人これを奉ずるは、此峩冠大帯を奉ずるなり、我れ賤くして人これを侮るは、此布衣草履を侮るなり、然れば即ちもと我れを奉ずるにあらず、我れ胡ぞ喜となさん、もと我れを侮るにあらず、我れ胡ぞ怒を爲さん」とありまして、自分の位が尊くて人がこれを奉るのは自分を奉るのではない。この峩冠大帯、高い冠、廣い帯、これは支那の高位高官の人の服装で、高位高官の標示であります。されば我れ高位高官にして人の崇